

ん

と舌内とは、後世、相混じり、共にんを用ひて記すこととなりたるが、「文」「轉」は舌内の文字なるに、その字音より察するに、兩者の混雜は、古にもその例ありしもの如し。又、後世の實際の發音は、唇内の文字、舌内の文字の何れたるを問はず、その直後の音の種類に應じて、mとも、nともなりその各の場合は、前記四に記せるが如し。四 舌内の文字の直後に行又はわ行の頭音を有する文字の續く時、そのあ行わ行の音がな行の音に轉呼せられ、や行の頭音を有する文字の續く時、そのや行の音がな行の拗音に轉呼せらるる場合あることは、なになにの各條下に説明せるが如く、又、唇内の文字の直後に、あ行又はわ行の頭音を有する文字の續く時、そのあ行わ行の音が、ま行の音に轉呼せられ、や行の頭音を有する文字の續く時、そのや行の音がま行の拗音に轉呼せらるる場合あることは、ままの條下に説明せるが如し。但し、この場合にも、「三」は唇内の文字なるにさん(三衣・さん(三會)を、共にサンネと轉呼するが如きは、唇内と舌内の混雜を示すものなり。四 ちまる(生る)・ちま(馬)・ちめ(梅)の如きは、實際の發音はンマル・ンマ・ンメなるに、古よりうの假名を用ひ來ると同時に、むらさめ(村雨)・むかし(昔)などをんらさめんかしと記せる類、古書に往往その例あり。

【字源】平假名んは、漢字「无」(吳音ム)の草體で、凡の漸次簡略になれるものと、「无」の下部の草體より出でたりとも、又、平假名に續け書きたるなりともいひて、一定せず。片假名ンは、片假名のニより出でたるなるべしとの説、眞に近きが如くたれど、又、「无」の上部より出でたらんとする説もあり。

【感】感嘆詞うんに同じ。

【助動】助動詞の音便。

【助】の音便。源世風呂「御前(ごん)所ん」の小指も、派手者だの」

め



【發音】三 主行第四の音。子音mが母音に結び附き發する。その發音の方法、位置に就きては、ま及びえの條下に説けるが如し。四 長音は、めえと書くとめーと書くとの兩法あり。本書にては、前者に依れり。五 一語の中に、直下めのに又はひの續く場合には、相合して、めの長音に發音すること多し。例へば、めいよ(名譽)めひ(延)をメヨ・メヒと發音する類。四 一語の中に、めの直後にうの續く場合には、相合して、拗長音ミヨオに發音する。例へば、めうが(若荷)かうめう巧妙をミヨオガオミヨオと發音する類。

【字源】平假名めは漢字「女」(訓、メ)の草體、變體平假名は「免」(吳音メン)の草體、又は「馬」(吳音メ)の草體、又は「米」(吳音メイ)の草體、又は「面」(吳音メン)の草體より出づ。片假名メは「女」の略體。萬葉假名として、前記「女」外、字音に據れるものに「迷」・「謎」・「毎」・「梅」・「妹」・「味」・「咩」・「賈」・「晚」・「綿」等、訓を取りたるものに「目」・「眼」・「海藻」等あり。

め 女【名】女性の人。をみな。をんな。むすめ。婦女子。(男)に對して。型ぬえ草のめにしあれば。【配】配偶の女性。つま。さい。【妻】世「朱買呂がめを教へけん年」和名妻、米。

め

妻いとほしの子いとほし【句】妻子の愛情に溺れて、親兄弟を疎外する形容。【諺語】女の神【句】めがみ(女神)に同じ。【男】の神に對して。【古語】萬葉をの神もゆるしたまひ女の神もちひたまひて。【古語】女の髪長【句】めがみなが(女髪長)に同妻を設く【句】妻をを迎ふ。梅垣女集「目變りて、めまうけて、そこにのみつきて」。

め 牝雌【名】女性の動物。めす。めん。(牡)に對して。世「蛇」尾はたらかさんを、めと知れ。俳諧通應庵「雌も連れず難をも連れずほととぎす」。

め 目【名】見る(見る)参照動物の、物を見る作用を具する器。まなこ。【眼】めつ(目付)に同じ。世「目が、口ほどに物を言ふ」目を見ること。見る作用。世「根崎心中」目が繁ければ、さもならず。世「曲調名」狸や蛇(め)の目を忍び、どうぞ抱かれて鼠とは、及ばぬ戀の身。【類】四は(眼)を見よ。【卵の目】目見張ること。めつけ。監視。源氏其屋「この玉が、きつと目になって、おさん様の側を、一寸も離れぬやうにしたによつて」。

め 縦横幾筋も交はりてある物の、間隙の處。記「かた淵に綱張り渡しめるよしによし寄り來」ね。【物】の一部。縦ひ、折り、合はせ、刻みなどしたる箇所。世「雪は、……いと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黒う眞白に見えたる」東海道名所記「目のつぶれたる指針」。

め 物の一部。縦ひ、折れ、よれたる箇所。世「硯……瓦の目にしがひて入りたる」。

め 雙六(ご)などの采(ご)の面にしるしたる點。萬葉「二采」の目のみにあらざ五つ六つ三つ四つさへあり雙六のさい。太平記「雙六」を打たれけるが、賽の目を論じて。【秤】の、寒暖計などに、度を計るために附けたるしるし。「目を盛る」。

め 秤にて計る量。はかりめ。重量。「目が足らず」。

め もくめ(木目)に同じ。【出】出資ひたる時。ばあひ。古今

め 女【名】女性の人。をみな。をんな。むすめ。婦女子。(男)に對して。型ぬえ草のめにしあれば。【配】配偶の女性。つま。さい。【妻】世「朱買呂がめを教へけん年」和名妻、米。

め

「憂き目のみ生ひて流るる浦なればかりにのみこそ螢は寄るらめ」世「辛い目を見候ひつる」。

め 目【名】目。め。【目】の略。目合はず【句】眠り得ず。源氏「ことさらに寐入りたまへど、更に御目も合はて、曉がたになりにけり」。

め 目荒し【句】大體を見る力あり。丹波與作「美濃路までかくれぬない干城」。

め 目移る【句】めうつり。源氏「時につつ様を變へて、今めかしきに目移りて、をかしきもあり」。

め 目驚く【句】見て驚く。目を驚かす。榮花「きぬの裾袖口、いと目もおどろきて見ゆ」。

め 目及ばず【句】「目も及ばず」に同じ。源氏「かぐや姫の、この世の濁にも汚れず、遙かに思ひのぼれる契高く、神代の事なれば、淺はかなる女、目及ばぬならんかしといふ」。

め 目が明く【句】閉ぢたる目を開く。【目端】の。目が。目先が見ゆ。氣が附く。注意が属く。源氏風呂「そこを、女房も得心して居ねえやあならねえ。目が明かずに惡」。

め 目かまし【句】やかましうばかり云つて見ねえな。それこそ、なほ逆み。つて出懸けるはな。【文字】を讀み得。讀書力。目が見ゆ。世「まづ讀めかしといふ。いかでか、片目もあきつかまつらばといへば」。

め 目が有る【句】注意して、要點を見の。がさず。監視す。

め 目輝く【句】まばゆく感ず。あまり立派にて、よく見えぬ程なり。榮花「えもいはずめてたき袖口衣のつまどものうち出しわたしたる見るに、目ががやきて、何とも見わきたる」。

め 目が利く【句】見分ける力。さぐる。鑑識を具ふ。續々「その善光」。

め 目がくつきさう【句】「目が附きさう」に同じ。

め 女【名】女性の人。をみな。をんな。むすめ。婦女子。(男)に對して。型ぬえ草のめにしあれば。【配】配偶の女性。つま。さい。【妻】世「朱買呂がめを教へけん年」和名妻、米。

目が眩(め)む(句)「目が、くらくらとして、物の姿動きて止まぬやうに見ゆ。目がまはる。目まひす。心奪はれて、わきま(句)が無くなる。」

目が眩(め)る(句)「前條(前)に同じ。塵塵今(今)の母に目がくられて、死んだ母を忘れたと思ふ恨が、恨めしや。物事が多く見て、趣味高くなる。」

目が覺(さ)む(句)「めざむ(目覺む)に同じ。」

目が据(さ)る(句)「見詰めたる。ま少しも眸を動かさぬやうになる。柳達(柳達)おあしを見る。目がすわり。」

目が高(たか)し(句)「見分ける力、すぐれた。目が利きてあり。鑑識高し。めだし。」

目が近(よ)し(句)「近眼なり。」

目が散(ち)る(句)「心をおちつけてたしかに見ること能はず。」

目が附(つ)きさう(句)「上の臉(かみ)と下の臉とが相合せんとする義。『いかにも睡たげなり。』」

目が附(つ)く(句)「目が注がる。注意が向く。目が届く。『こまかき點まで、注意が行きわたる。』」

目が飛(と)出る(句)「値段の法外に高き形容。目玉が飛び出る。『烈しく叱られた形容。目玉が飛び出る。目玉が拔出(はきだ)る。』」

目が無(な)し(句)「心を奪はれて、靜かに見分け考ふる力を失ひてあり。目が眩(め)る。目がくらむ。目が見えず。『風流西海(西海)』(絶句)が仕掛に逢うては、いかな義經公も、目は無し。』」

目が放(はな)されず(句)「不安心にて、監視を怠ること能はず。『じ。』」

目が早(はや)し(句)「めばやし(目早し)に同じ。目光(めくわ)と認めて、きびしく注意す。目を光らす。にらむ。』」

目が廻(ま)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『華(は)爪(つま)の極樂、火の地獄、捨放(しやほう)』(絶句)は目が廻る。』」

目が眩(め)ふ(句)「前條(前)に同じ。『塵塵父(ちち)こそ、常(とこ)は風氣(ふうき)』とて、目のまふ、膝の振ふとは仰せられ候へ。』」

目が眩(め)る(句)「前條(前)に同じ。『塵塵父(ちち)こそ、常(とこ)は風氣(ふうき)』とて、目のまふ、膝の振ふとは仰せられ候へ。』」

目が参(ま)る(句)「目に留(とど)まるに同じ。『狂言人馬(きやうげんば)』あれへ出て、目みえをせい。……御目も参らば、五三日も逗留(とどま)があらうと云うて。』」

目が見(み)ゆ(句)「目能く物を見る。『文字(もんじ)を讀み得。讀書力(とくしょりき)を具ふ。』」

目が物(もの)を言(い)ふ(句)「目つきにて、相手に意を通ず。目に物を言はす。『目が行く。』」

目が行(い)く(句)「酒に酔ひて、眼がちらちらとす。『狂言拔段(きやうげんはくだん)』ああ、いかう酔うた事かな。これでこそなれ、よう、その男が、飲まずに行かうよ。目がゆく、ゆく、お目が行き候。ああ、いから酔うた。』」

目から鼻(はな)へ抜(ぬ)ける(句)「敏捷なる形容。『歌舞(かぶ)』目から鼻へ抜目(ぬ)の無い女主人(にょしゅじん)』」

目から火(ひ)が出る(句)「頭部を強く物に打ち當てたる時の感じの形容。『目借る蛙(めがかりか)』(句)夏の短夜に眠を催すは、蛙(か)が人の目を借るがためなりとの俗説による語。『蛙の目借時(めがかり)』参照。夫木(つまき)つとめすと寝もせて夜を明かす身に目借る蛙の心なきこそ。』」

目穢(めが)る(句)「染色を姪婦に見する時は、その色あせてきたなくならない。『古の俗説(ふるのよくせつ)』(頭註密勘に見ゆ)に基きていふ。』」

目穢(めが)る(句)「染色を姪婦に見する時は、その色あせてきたなくならない。『古の俗説(ふるのよくせつ)』(頭註密勘に見ゆ)に基きていふ。』」

目穢(めが)る(句)「染色を姪婦に見する時は、その色あせてきたなくならない。『古の俗説(ふるのよくせつ)』(頭註密勘に見ゆ)に基きていふ。』」

目穢(めが)る(句)「染色を姪婦に見する時は、その色あせてきたなくならない。『古の俗説(ふるのよくせつ)』(頭註密勘に見ゆ)に基きていふ。』」

目昏(めくら)む(句)「目くらみたり。『目昏(めくら)む、肝消えて、馬にもたまらざりける間。』」

目眩(めくら)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『船(ふね)……端に立てる者どもこそ、目くる心地すれ。』」

目眩(めくら)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『船(ふね)……端に立てる者どもこそ、目くる心地すれ。』」

目眩(めくら)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『船(ふね)……端に立てる者どもこそ、目くる心地すれ。』」

目眩(めくら)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『船(ふね)……端に立てる者どもこそ、目くる心地すれ。』」

目眩(めくら)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『船(ふね)……端に立てる者どもこそ、目くる心地すれ。』」

目眩(めくら)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『船(ふね)……端に立てる者どもこそ、目くる心地すれ。』」

目眩(めくら)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『船(ふね)……端に立てる者どもこそ、目くる心地すれ。』」

目眩(めくら)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『船(ふね)……端に立てる者どもこそ、目くる心地すれ。』」

目眩(めくら)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『船(ふね)……端に立てる者どもこそ、目くる心地すれ。』」

目眩(めくら)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『船(ふね)……端に立てる者どもこそ、目くる心地すれ。』」

目眩(めくら)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『船(ふね)……端に立てる者どもこそ、目くる心地すれ。』」

目眩(めくら)る(句)「目が眩(め)むに同じ。『船(ふね)……端に立てる者どもこそ、目くる心地すれ。』」

目轟(めくら)く(句)「見て驚く。『大鶴萩の縁物の三重がさねの御唐衣に、秋の野をぬひものにし繪にも書かれたるにやとぞ、目もどろきて見たまへし。』」

目と鼻の間(めくら)「距離の極めて近き聲。『目留(めくら)る(句)』「目留(めくら)る」に同じ。『源氏(げんじ)あやしらうたげに、目とまるべきふし加へなどして。』」

目と目に知らせあふ(句)「目くばせして、互に意思を通ず。『新版(しんぱん)歌舞(かぶ)』なるほど思ひ切りませう。……、そんなら、そなたも、お前も、互に目と目に知らせあひ。』」

目と目に物を言はす(句)「互に目つきにて意を通じあふ。『俗曲(しやくきょく)紙屋(しや)川(がわ)』「互にそれと見合はする、目と目に物を言はせつ。』」

目と目を見合はす(句)「見合はす。『目と目を見合はす(句)』「見合はす」に同じ。『太平記(たいへいき)』「言はねばこそあれ、戀しきものと見違りたまへば、興市郎(きんいちろう)も、俱に目と目を見合はせて、赤らむ顔を見て取る彈正。』」

目に餘る(めくら)「名」数多く、又は區域廣大にして、一目に見渡すを得ず。見分けるを得ず。『眼(めくら)に餘る。』」

目に餘る(めくら)「名」数多く、又は區域廣大にして、一目に見渡すを得ず。見分けるを得ず。『眼(めくら)に餘る。』」

目に在(あ)る(句)「その物は、目の前には存在せぬに、見ゆるやうに感ず。『當時の光景、今も目に在り。』」

目に在(あ)る(句)「その物は、目の前には存在せぬに、見ゆるやうに感ず。『當時の光景、今も目に在り。』」

目に在(あ)る(句)「その物は、目の前には存在せぬに、見ゆるやうに感ず。『當時の光景、今も目に在り。』」

目に在(あ)る(句)「その物は、目の前には存在せぬに、見ゆるやうに感ず。『當時の光景、今も目に在り。』」

目に在(あ)る(句)「その物は、目の前には存在せぬに、見ゆるやうに感ず。『當時の光景、今も目に在り。』」

目に在(あ)る(句)「その物は、目の前には存在せぬに、見ゆるやうに感ず。『當時の光景、今も目に在り。』」

め

るが如くに感ず。『源氏』かの黄昏(かき)の私言、今、目に浮ぶ種ぞかし」
目に懸(か)る【句】「目に著く。目より離れず。『山崎七言』目、咲ぬやと越えはゆけども山嶺なほ目にみかる雲だにもなし」
「出會ふ。面會す。〔多くは、接頭語お(御)又はおん(御)を添へていふ〕」
「義經記」幼少の時、御目にかかりて候ひけるやらん」
目に懸く【句】「目を著く」に同じ。
「續古今」雲のある外山の末の、一つ松目にかけて行く道ぞはるけき」
「目に觸れしむ。見す。〔接頭語お(御)又はおん(御)を添へていふ〕」
「この文も、御目にかけて」目進上す。贈呈す。〔接頭語お(御)又はおん(御)を添へていふ〕
「この品、輕少なながら、御目にかかけ候」
目に角(かど)を立つ【句】「怒を含めて、鋭く物を見る。眼(まなこ)に角を立つ。目角(かど)を立つ。目くじらを立てつ」
目に適(あた)ふ【句】「目に入る」に同じ。眼鏡にかなふ。
目に障(さ)る【句】「見るに、妨となる。空(そら)なるや水松(みづまつ)に隠るる海藻(うみづも)とはえこそかづかね目にさはりつつ」
目に正月を爲す【句】「目を樂します。若風(わかふう)都とは爰の事なるべし。……目に正月をさせて」
目にす【句】「みる(見る)」に同じ。
目に立つ【句】「たつ(立つ)」は四段活用。特別に目に著く。きはだちて見ゆめだつ。玉葉(たまは)つくづくと見るに心はくればとど怪しと人の目にや立つらん」
目に立つ【句】「たつ(立つ)」は下二段活用。『目を立つ』に同じ。山(やま)疊(かさね)なき鏡の上にゐる座を目に立てて見る世と思はばや」
目に近し【句】「目前の事なり。さし當りての事なり。絶えず目に著く。めぢかし。源氏目に近き今日、明日の見苦しさを緒はんとする時もあるを」

め

目にちらつく【句】「目に浮ぶ」に同じ。
目に著く【句】「目立ちて見ゆ。目に」とまる。目にかか。元(もと)集「目につくは少かりけりをみなへしあまた多かるる嵯峨野なれども」
「常に目に浮ぶやうに思はれて忘れ得ず。目より離れず。『萬葉』三輪山の林の崎のさぬはりの衣(きぬ)に著くなす目に附くわが兄(せ)」
目にて目(め)を償ひ、齒(は)にて齒(は)を償ふ【句】「新約全書(の馬太(また)福音書)第五章第三十八節に出づ」己を睨(にら)みたる者には睨(にら)み返し、己を罵(ののし)りたる者には罵(ののし)り返す。〔復讐心の強き形容〕「えず。目に留らず【句】迅速にして、よく見目に留る【句】」
「目に著く」に同じ。
「見て、氣に入る。源氏善き、惡しき事、目にも耳にもとまる有様を」
「その折につきなく、目にもとまらぬなとを、推量(すいりやう)らず詠み出たる」
目に這入りさう【句】「極めて、小き物の形容。『源氏』萬葉子(の)簞(だん)笥(き)から、目へ這入(こ)りさうな菓子を出し」
目にぶら下る【句】「目に懸(か)る」に同じ。〔接頭語お(御)又はおん(御)を添へていふ〕
「長門女(の)成切(なりきり)四五日、お目にぶらさがらぬ」
「と見ゆ。目に觸る【句】」
「ちらりと見ゆ。ちよつ目に佛無し【句】佛などの事は思はず。佛罰(ぶつばつ)を顧みず。『萬葉』千本(の)鑿(さく)術(じゆつ)の習、金見ると、目に佛なく、手ばしかく拾ひ集めて」
目に見合す【句】「この折に遇はんとす。空(そら)の時時(とき)底(そこ)に息を放つやうにして、集ひたる者どもの顔を見渡せば、その目に見合せんと集ひたる者ども、……ひしめき合ひたり」
目に見餘る【句】「目に餘る」に同じ。『集』、この御前(ごまへ)たちのおはしし集まらせたまへる折は、わが目に見奉りあまたせたまひては、只今、物見知り、古の事覺えたらん人に、物のはざまよりかいばませ奉らばやとまでぞのたまはせける」
目に見えぬ鬼神(きしん)を動かす【句】「古今和歌集の序に見えたる語に本づく」和歌の徳、又詠歌の技にすぐれたるをいひあらはせる語。『萬葉』この人、年つもるまであらましきかげに、いかばかり目に見えぬ鬼神をも動かしたまはしに」
目に見す見す【句】「見す見す」に同じ。『源氏』白たへの衣に似たる梅の花目に見す見すも衰ふるかな」
「源氏」あましましうのとかくいふを、……目に見す見す、世に斯かる事こそはありけれと、うとましましうなりぬ」
目に見ゆ【句】「みゆ(見ゆ)」に同じ。『源氏』「そなたの目には見えぬか」
「著しく目に著く。明かなり。めだつ。一葉(ひと)枯(か)せ寒くなるのが目に見ゆる」
「十分に分(わ)かる。篤(あつ)と合點(ごうてん)が行く。保元」
「爲朝(みけあさ)が弓勢(ゆづり)は、目に見えたる事ぞかし、過すなと宣ひければ」
「天の網(あみ)鳥(とり)人をたたらすは遊女の商賣(しやうばい)今日に見えたか」
目に見る【句】「みる(見る)」に同じ。『源氏』「音にも聞き、目にも見よ。宮の傳に長兵衛尉長谷部信連とは、わが事なり」
目にも溜らず【句】「あまりに早くて、見てゐる暇なし。『目にも溜らぬ早業』」
目に物言はす【句】「目で物を言ふ」に同じ。『無耳(むみみ)川(がは)』互(たがひ)にそれと見合はする、目と目に物をいはせつて」
目に物見す【句】「目に見せて知らしむ。『源氏』秋來ぬと目に物見する一葉(ひと)かな」
「思ひ知らするため、辛き目にあはす。物を見す。狂言(きやうげん)老武者」
「おのれ憎い奴(やつ)の、これほどにいふに、ならぬといふ。それなら、目に物見せうといふ」
「ふ」に同じ。
目に物を言はす【句】「目が物を言ふ」に同じ。『源氏』或物を見たる後、更に他の物を見ること。『源氏』「月花に配れ富士見る目のあまり」
「語」目の有る處へ玉【句】次條の略。『源氏』

め

目の有る處へ、玉が寄る【句】「目の寄る所(とこ)に玉が寄る」に同じ。『源氏』「目の暇(ひま)に」
「見るに、多くの時を費す。源氏假名文(かみなぶん)に見たまふは、目のいとまひりて念佛(ねがひ)も懈怠(けんたい)するやうに、やくなうてなん」
目の色を替ふ【句】「怒り、又は驚きて、目を張り、且つ目に血走らす。和合人」
「てんに、……目の色を替へて」
目の内【句】「目のなか。物事に目を配る様子。めつき。めも。根(ね)本(もと)共(とも)佐(さ)孝(こう)行(こう)といひ、器量(きりやう)といひ、目の内に見處あれば、この子は一はねはねうと思へば、飛びつく程欲しいか」
目の中【句】「にある佛」
「めぼ(めぼ)け」(目佛)に同じ。『源氏』「目のうちにある佛小(こ)さし(こ)いふ句に花かごに入る若(わ)きは善賢(ぜんけん)象」
目の内に見ゆ【句】「前途(ぜんず)の事、明らかに豫測(よそ)せらる。目に見ゆ。『源氏』「我(われ)に代り、敵(たか)の手にかかるとは、目の内に見えぬれども」
目の移(うつ)り【句】「めうつり(目移)」に同じ。『源氏』「稻妻(いなづま)や山懸(やまがけ)ふ猿(さる)の目(め)のうつり」
目の上に目を書く【句】「物事を明らかにめんとあせる形容。『源氏』「美角(みかく)目の上に目を書く人(ひと)やほととぎす」
目の上の瘤(うぶ)【句】「己より位置高くして、邪魔になる者の譬(たとへ)」。目の上のたんだ瘤(うぶ)【句】前條に同じ。
目の敵【句】「出會ふ度ごとに憎く思ふこと。又その憎く思ふ相手の人。目の藥【句】」
「めぐすり(目薬)」に同じ。
目に見えなく思ふ物事【句】「目の慰(なぐさ)となる物事(ものごと)の毒(どく)に對して」
「女夫(にょふ)光(みつ)りぞ出づる夏の築山(きよやま)といふ句に」
「名にしおふ新樹(あらたけ)を見るも目の藥」
目の黒い中【句】「生きてゐるうち。目の玉の黒いうち。目の先【句】」
「めさき(目先)」に同じ。『源氏』「新選(しんせん)李(り)遠(えん)目の先へ來てから早き競馬(けいば)かな」

め

目の有る處へ、玉が寄る【句】「目の寄る所(とこ)に玉が寄る」に同じ。『源氏』「目の暇(ひま)に」
「見るに、多くの時を費す。源氏假名文(かみなぶん)に見たまふは、目のいとまひりて念佛(ねがひ)も懈怠(けんたい)するやうに、やくなうてなん」
目の色を替ふ【句】「怒り、又は驚きて、目を張り、且つ目に血走らす。和合人」
「てんに、……目の色を替へて」
目の内【句】「目のなか。物事に目を配る様子。めつき。めも。根(ね)本(もと)共(とも)佐(さ)孝(こう)行(こう)といひ、器量(きりやう)といひ、目の内に見處あれば、この子は一はねはねうと思へば、飛びつく程欲しいか」
目の中【句】「にある佛」
「めぼ(めぼ)け」(目佛)に同じ。『源氏』「目のうちにある佛小(こ)さし(こ)いふ句に花かごに入る若(わ)きは善賢(ぜんけん)象」
目の内に見ゆ【句】「前途(ぜんず)の事、明らかに豫測(よそ)せらる。目に見ゆ。『源氏』「我(われ)に代り、敵(たか)の手にかかるとは、目の内に見えぬれども」
目の移(うつ)り【句】「めうつり(目移)」に同じ。『源氏』「稻妻(いなづま)や山懸(やまがけ)ふ猿(さる)の目(め)のうつり」
目の上に目を書く【句】「物事を明らかにめんとあせる形容。『源氏』「美角(みかく)目の上に目を書く人(ひと)やほととぎす」
目の上の瘤(うぶ)【句】「己より位置高くして、邪魔になる者の譬(たとへ)」。目の上のたんだ瘤(うぶ)【句】前條に同じ。
目の敵【句】「出會ふ度ごとに憎く思ふこと。又その憎く思ふ相手の人。目の藥【句】」
「めぐすり(目薬)」に同じ。
目に見えなく思ふ物事【句】「目の慰(なぐさ)となる物事(ものごと)の毒(どく)に對して」
「女夫(にょふ)光(みつ)りぞ出づる夏の築山(きよやま)といふ句に」
「名にしおふ新樹(あらたけ)を見るも目の藥」
目の黒い中【句】「生きてゐるうち。目の玉の黒いうち。目の先【句】」
「めさき(目先)」に同じ。『源氏』「新選(しんせん)李(り)遠(えん)目の先へ來てから早き競馬(けいば)かな」

也

○

2

をゑゐわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

めいじようか 名稱價 [名] 「經」がくめん
名號。及「とあり」ほまれ。名聲。名譽。

めいじようか 名稱爲替 [名] 「商」
内國貨幣と外國貨幣との價格相違より生
ずる爲替相場。(真正爲替に對して)

めいじよう 嘆色 [名] 夕方の、ほのぐら
き色。暮色。

めいじよう 明燭 [名] あかるき燈火。

めいじよう 名所盡 [名] 歌又は繪
などの、多くの名所を記し集めてあるもの。
二代男 堀に嵯峨野の名所づくし、其
處が嵐山、これが廣澤の月

めいじよう 名所方角考 [名]
「書」我國諸地方の名所を、東西南北に分
ちて、方角を示し、古歌を引き、連歌の
便に供せるもの。一卷、宗祇法師の著

めいじよう 名所方角集 [名]
「書」素外の著。安永四年成る。

めいじよう 名所山 [名] 名所なる山。
「著」名月やつ指先の名所山

めいじよう 名所類字和歌 [名]
「書」代々の勅撰集より、名所の和歌を選
出し、國別別に記したるもの。四卷。細
川幽齋の著。一名、小名寄、類字名寄。

めいじよう 名所繪 [名] 名所を畫ける
繪。鎌田兵衛名所繪「血汐流れて、名所繪の
屏風彩」しく如くなり

めいじよう 目を閉づ。安心
して死ぬ。往生す。瞑目す。

めいじよう 明言 [名] 明らかに言ふこと。
判然と言ひ切ること。言明。

めいじよう 楊師道の詩に
「雁落逐三鳴弦」とあり「弓弦を引きて鳴
らすこと。中古、天皇御入浴の時、貴
人出產、病氣の時などに、惡魔を鎮ふため
に、矢をはがす、手にて、弓弦を鳴らしし
こと。弓矢は武器の第一として重んじ、そ
の弓弦の音のみにて、惡魔を怖れしむ
るに足ると信ぜしに依るものにて、なほ、

めいじよう 鳴弦 [名] 楊師道の詩に
「雁落逐三鳴弦」とあり「弓弦を引きて鳴
らすこと。中古、天皇御入浴の時、貴
人出產、病氣の時などに、惡魔を鎮ふため
に、矢をはがす、手にて、弓弦を鳴らしし
こと。弓矢は武器の第一として重んじ、そ
の弓弦の音のみにて、惡魔を怖れしむ
るに足ると信ぜしに依るものにて、なほ、

めいじよう 鳴弦 [名] 楊師道の詩に
「雁落逐三鳴弦」とあり「弓弦を引きて鳴
らすこと。中古、天皇御入浴の時、貴
人出產、病氣の時などに、惡魔を鎮ふため
に、矢をはがす、手にて、弓弦を鳴らしし
こと。弓矢は武器の第一として重んじ、そ
の弓弦の音のみにて、惡魔を怖れしむ
るに足ると信ぜしに依るものにて、なほ、

めいじよう 鳴弦 [名] 楊師道の詩に
「雁落逐三鳴弦」とあり「弓弦を引きて鳴
らすこと。中古、天皇御入浴の時、貴
人出產、病氣の時などに、惡魔を鎮ふため
に、矢をはがす、手にて、弓弦を鳴らしし
こと。弓矢は武器の第一として重んじ、そ
の弓弦の音のみにて、惡魔を怖れしむ
るに足ると信ぜしに依るものにて、なほ、

めいじよう 鳴弦 [名] 楊師道の詩に
「雁落逐三鳴弦」とあり「弓弦を引きて鳴
らすこと。中古、天皇御入浴の時、貴
人出產、病氣の時などに、惡魔を鎮ふため
に、矢をはがす、手にて、弓弦を鳴らしし
こと。弓矢は武器の第一として重んじ、そ
の弓弦の音のみにて、惡魔を怖れしむ
るに足ると信ぜしに依るものにて、なほ、

めいじよう 鳴弦 [名] 楊師道の詩に
「雁落逐三鳴弦」とあり「弓弦を引きて鳴
らすこと。中古、天皇御入浴の時、貴
人出產、病氣の時などに、惡魔を鎮ふため
に、矢をはがす、手にて、弓弦を鳴らしし
こと。弓矢は武器の第一として重んじ、そ
の弓弦の音のみにて、惡魔を怖れしむ
るに足ると信ぜしに依るものにて、なほ、

めいじよう 鳴弦 [名] 楊師道の詩に
「雁落逐三鳴弦」とあり「弓弦を引きて鳴
らすこと。中古、天皇御入浴の時、貴
人出產、病氣の時などに、惡魔を鎮ふため
に、矢をはがす、手にて、弓弦を鳴らしし
こと。弓矢は武器の第一として重んじ、そ
の弓弦の音のみにて、惡魔を怖れしむ
るに足ると信ぜしに依るものにて、なほ、

めいじよう 鳴弦 [名] 楊師道の詩に
「雁落逐三鳴弦」とあり「弓弦を引きて鳴
らすこと。中古、天皇御入浴の時、貴
人出產、病氣の時などに、惡魔を鎮ふため
に、矢をはがす、手にて、弓弦を鳴らしし
こと。弓矢は武器の第一として重んじ、そ
の弓弦の音のみにて、惡魔を怖れしむ
るに足ると信ぜしに依るものにて、なほ、

めいじよう 鳴弦 [名] 楊師道の詩に
「雁落逐三鳴弦」とあり「弓弦を引きて鳴
らすこと。中古、天皇御入浴の時、貴
人出產、病氣の時などに、惡魔を鎮ふため
に、矢をはがす、手にて、弓弦を鳴らしし
こと。弓矢は武器の第一として重んじ、そ
の弓弦の音のみにて、惡魔を怖れしむ
るに足ると信ぜしに依るものにて、なほ、

めいじよう 英 Consecutive number
單位の名を終に附けて呼ぶ時の數。例
ば、三人五里十五日など。單名數複名
數の別あり。各條を見よ。(不名數に對し
て) 漢書の高帝記に「民前或相乘保」
山澤「不書名數」とあり「月籍。人別
の義」

めいじよう 命數法 [名] 「數」英の
法に「命數法」數に名を命ずる方
法。數國に分ちて組織的に命名する方法。
整數は、その數無限なるが故に、その一
に別別の名を附するは、不可能且つ不
便なるより案出せられたるものにて、例
へば、支那及び我國にて、一より十までの
數には、一特別の名稱を附すれども、そ
れ以上の大數には、主として、十の羅
に新たな名稱を作りて、十の十倍を百、
百の十倍を千、千の十倍を萬、萬の十倍を
億、億の十倍を兆とす、兆の十倍を京と
す、英國にては、千までは、支那及び我國
のと同じなれど、それ以上は千の十倍を
Million(百萬)、Millionの百萬倍をBillion
(十億)とする。而して、十の羅毎に、新名稱を
作るは、即ち十進法の命數法なり。

めいじよう 名水 [名] 名高き水。すぐれ
たる水。例へば、茶ノ湯にて、山城國宇治
橋の三の間(一)の水を、天下第一の名水と
呼べる類。犬氣連、これや茶桶の粗忽なる
らん(いふ句に)名水の在所(一)教へず汲
みにやり

めいじよう 明水 [名] 周禮の秋官篇に「取
明水於日、取明水於月」とあり「神に

めいじよう 明告書 [名] 或事柄を明
らかに告げること。明告。又

めいじよう 明骨魚乾 [名] 鱸車魚(一)又
は鰯類の軟骨を煮て乾かしたる食料品。
透明、白色なるを上品とし、支那人の間に
賞用せられ、我國より輸出す。

めいじよう 命根 [名] 種樹書に「凡花木
有直根一條謂之命根」とあり「その
生命を保つ根元。

めいじよう 命魂 [名] 生命と魂魄と。いの
ち。生命。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 迷魂 [名] 迷ひて浮ばれぬ亡
霊。迷魂。みやうこん。

めいじよう 明照大師 [名] 「人」淨
土宗の開祖源空の大師號。明治四十四年
勅諡せらる。

めいじよう 明断 [名] あきらかなること。
明断。めいじよう 明断 [名] あきらかなること。
明断。めいじよう 明断 [名] あきらかなること。
明断。

めいじよう 名籍 [名] なふだ。人別。名
簿。盛衰記、中將、寺僧に硯を召し寄せて、
柱に名籍を書きたまふ。正三位行左近衛
權中將平朝臣重衡とぞ注(一)される

めいじよう 名籍簿 [名] 人別帳。名簿。
權中將平朝臣重衡とぞ注(一)される

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 名譽と節義と。
めいじよう 名譽と節義と。

めいじよう 銘撰平・銘仙平 [名] かへ
いせいら(嘉平次平)に同じ。

めいじよう 名僧 [名] 名高き僧。すぐれた
る僧。

めいじよう 明聰 [名] そらめい(聰明)に同
めいじよう 迷走神經 [名] (醫)
腦神經の十二對に分れたる中の第十對。
延髄の上外側に發し、頭骨の底部なる頸
靜脈孔を通じて、頸部に出て、胸部並びに
腹部に下り、分布區域甚だ廣くして、耳後
の皮膚及び頸・胸・腹部の内臓諸器、即ち
咽頭・喉頭・食道・氣管・肺・心臓・胃・血管等
に及び、或は知覺、或は運動を司り、殊に
心臓の運動に至大の關係あり。

めいじよう 名族 [名] 名高き一族。有名な
る家が。名門。右族。「にいふ」

めいじよう 名板 [名] 板扉・羽目(一)などの
板の合目(一)に打ち附くる、幅狭き板。
網を編む時、その目の大小を定むる定
規とし、これを繞りて、結節を造る板。例
へば、目の大きき一寸の網を造るに、廣さ一
寸の目板を用ふる類。目ジャカアド紋
織機の裝置にて、經絲の順序に従ひて、通
絲の位置を定め、これを常に一定の位置
に在らしむるに用ふる物。普通は木製な
れども、磁器・鐵・竹などにて造りたるも
のあり。

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

めいじよう 命題 [名] 題號を附くるこ
と、又附けたる題號。題(論)「英」by
position」判斷」を、言語にて言ひあら

はしたるもの。例へば、「人は萬物の靈長なり」と云ふ。『英』(Proposition) 定理及び作圖の總稱。

めいだい 明大「名」『めいゐる(明位)を見よ。』東京市に在る私立明治大學の略稱。

めいたいぎよ 明太魚「名」めんたい(明太)を見よ。「太」を見よ。

めいたう 名刀「名」名高き刀。すぐれたる刀。名剣。

めいたう 銘刀「名」銘を打ちてある刀。

めいたう 明堂「名」『周禮の考工記、及び禮記の明堂位篇に見え、又、孟子の梁惠王下篇に「明堂者、王者之堂也」とあり。陽位に建て、八窓、四闔なるに因りて、明といふ。』支那周代に、王者の諸侯を朝参せしめし殿堂。『事物紀原』に「今醫家記鍼灸之穴爲二個人、點三誌其處、一名明堂、按銅人腋穴圖序曰、黃帝問岐伯、以三人之經絡、窮妙於血脈、參三變乎陰陽、盡書其言、藏於金匱之室、泊三雷公請問、乃坐明堂以授之、後世之言明堂者、以「此」とあり。』人形に鍼灸の穴を點誌したるもの。

めいだうがくは 明道學派「名」『『ていめい(程明道)參照』儒學の一派。支那宋の程頤(程明道)の唱導せる性理の學。

めいだうくわん 明道館「名」『越前國福井藩の學校。安政二年の創立。明治二年、明新館と改稱す。』Bosman(明德館)を見よ。

めいだうせんせい 明道先生「名」『人』ていめい(程明道)の尊稱。

めいだうづ 明堂圖「名」明堂の圖。古の典樂寮の寶物たりし明堂圖もこれなるべし。古車、施樂院領、九條邊古所に、明堂圖の有るを見人、必ず目を病むの由。『續古書』典樂寮明堂圖は、靈物なり。雅康寮御時、本寮破れて、捨ておきて、よろづの人見けり。

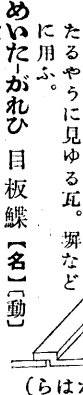
めいだうづ 明堂殿「名」古、典樂寮に屬して、その寶物なる明堂圖を納めおきし所。『増補大風吹きて』、明堂殿もまるびぬ。この内には、木にて人形を造りて、宮殿を金にて造りて入れたる寶あり、眼をあてては見ぬものなり。おのづからあやまりて見つる人は、目のつづれけるぞおそろしき。

めいたがはら 目板瓦「名」合目(目)が、目板(目)を附けたるやうに見ゆる瓦。塀などに用ふ。

めいたがれび 目板鯉「名」(動)軟鰭類に屬する魚。體は、卵形にして薄く、長さ尺餘に達し、右側面は濃灰色にして、褐色の細き斑線あり。口は小さく、極めて淺く裂け、兩眼は、右側面にありて、高く突き出で、我國及び支那の泥砂底の海中に棲息す。このはがれび、まつばがれび。めたがれび。めだかがれび。もちがれび。

めいたさじ 目板刺「名」ジャカアド紋織機の裝置に於て、目板の孔に、通絲を通すこと。めいたとほし。

めいたつ 明達「名」聰明にして、事物に通達せること。『板刺』に同じ。



(らはがたいめ)

めいたとほし 目板通「名」めいたさじ(目板刺)の附きである羽目。

めいたはめ 目板羽目「名」(建)目板の附きである羽目。

めいたふ 明答「名」明らかに答ふこと。又その答。確答。『朝。翌朝。』

めいたん 明旦「名」あくるあさ。明こと、又、その決斷。明裁。

めいたん 明斷「名」明らかに決斷すること。又、その決斷。明裁。

めいたん 名池「名」めいしよ(名所)に同じ。に、歩を運ばずといふ事なし。『諸曲采女。』

めいたん 名池「名」名高き池。『諸曲采女。』

めいたん 明智「名」明らかになる智慧。『猿澤の池とて、かくれなき名池の候ふ。』

めいたん 明治「名」『易經の説卦傳に「離也者明也、萬物皆相見、南方之卦也、聖人南面聽天下、嚮明而治、蓋取諸此」也』とあり。』天下を明らかに治むること。天下の明らかに治まること。

めいち 明治「名」『前條に引ける易經の文に本づく。』明治天皇の御代の年號(紀元二五二八年—二五七二年)。

めいち 明治「名」明治年間に於ける四人の高僧、即ち福田行誠、釋雲照、七聖、恆順、原坦山。

めいち 妙竹林話「名」妙竹林話七偏人「名」『書』しちへんじん(七偏人)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治三十三年戰役「名」ほくじんじん(北清事件)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治三十七八年戰役「名」にちろせんえき(日露戰役)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十五年の變「名」(壬午の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めいち さんじんふさんねんせんえき 明治十七年の變「名」(甲子の變)に同じ。

めい

めい

と。的。
めいちゅうかい 命中界「名」(「兵」或距離に於て、彈丸の命中すべき効力の區域。例へば、射撃の目標垂直にして、某高度を有する場合の命中界は、彈丸の散布界、近著彈道の危險界及び諸彈の或跳飛界の三區域を含有する、楕圓形の界線にて表示する類。)

めいちゅうだん 命中彈「名」命中したる著書。「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めいちゅう 名著「名」名高き著書。すぐれたる著書。

めい

労働の實現を目的とする總同盟罷業を決行することを議決し、翌年のこの日その第一回示威運動を行ひしに始まり、次いで一八八九年、巴里に組織せられし第二インターナショナルは、爾後この日を萬國労働者の國際的同胞主義と階級的一致とを表示するための總同盟の日と決定し、翌年同日には、歐米兩大大陸に亙りて、盛大なる國際的労働祭は行はれたり。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めいとう 名鳥「名」名高き鳥。すぐれたる鳥。

めい

れ、冥途の使を人れじとなり」冥途の友「句」冥途の旅の道づれ。生玉心中「我は初音か、時鳥冥途の友と鳴き連れて」

冥途の鳥「句」(「動」)時鳥を冥途より来る鳥なりといふこと、古來の俗説にして、邦人の僞撰に係る十五經に「我汝舊里化成鸛鷀鳥、示怪語、鳴別都頓宜靜」とあるも、この俗説に依りしなり「ほごさき(時鳥)の異稱、曾我公權山「やよや待て、なれよ、冥土の鳥ならば、死出の山路に關するて、先立つ、わが子留めよかし」

冥途の道には、王無し「句」一たびこの世を去れば、一切平等にして、階級の差別無し。「(「諺語」)

冥途の土産「句」あの世へのみやげ。冥途の呼使「(「動」)「冥途の使」に同じ。冷泉義典「藥頼に未だくみ、これぞ冥途の呼使」

めいとう 鳴動「名」鳴りて動くこと。諸曲「竹生鳥」御殿、しきりに鳴動して」

めいとう 明德「名」(「書經」の君陳篇に「棗棗非明德惟馨」とあり)明らかなる德行。墨翟「明德賢才の御子」

めいとう 明德「名」(「禮記」に「在明明德、在新民」とあるに本づく)後小松天皇の御代の年號。(紀元二〇五〇年—二〇五四年)

めいとう 明德「名」(「次條」に同じ。明徳の亂「句」明徳二年十二月、山名時氏の子孫の内訌より起りし戰亂。

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めいとう 名徳「名」聲名、德行あること、又その人。「名徳の僧」「名徳多し」

めい

新地植屋抱「句」の遊女梅川の色に溺れて、某侯より託せられたる金を費消して、梅川を購ひ、その故郷なる大和國新口(「村」に走り、舊知の家に潜伏したりしことと露顯して、捕縛せられ、同年十二月五日牢死し事實を聞かせるもの。翌八年三月、大阪豊竹座にて始めて興行し、その後、安永二年、豊竹座にても、同一事實を専断、箱駒の脚色せるものを「傾城戀飛脚」と題して興行せり。

めいいち 命日「名」捨命日の義なれども、捨の字は世俗の忌む所なるが故に、略して「いふとぞ」(忌日)に同じ。俗づれ「月忌命日の齋非時也」

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

めいは 名馬「名」名高き馬。すぐれたる馬。

名物記に入りたる外六枚」

鉢に薫らせ」俗うれづれ「琴の遠音、尺八、

る涙に道昏れて、行く先、更に冥冥なり」

めいもう 冥蒙【貌】深奥なるさま。
めいめい

鈴有子、鯉魚負之、教誨爾子、式穀似之」とあるに本づく「やうし(養子)の譬。めいれい。命令。〔名〕作爲を命ずる法令、即ち或行爲を爲すことを命ずる法令、(禁令に對して)〔法令〕参照。目特定の作爲の義務を命ずる行政處分。(禁令に對して) 四(法)天皇が、議會の協賛を要せず、その大権によりて、發せられ、又、官廳が、その權限によりて、一般人民に發する法則。天皇の大権によりて、發せらるるものは、即ち勅令又、官廳のは、官廳の種類によりて、閣令省令、警視廳令、北海道廳令、府縣令、北海道支廳令、郡令、島嶼令等に分ち、その他、朝鮮總督府の制令及朝鮮總督府令、關東都督の關東都督府令、樺太廳長官の樺太廳令も、これに屬す。又、命令を、實質によりて、法規命令、處分命令の二に分ち、法律に關する關係によりて、緊急命令、執行命令、獨立命令、委任命令の四に分ち、官府に對するものと否によりて、行政命令と法規命令との二に分ち、法律との區別は、明治十九年勅令第一號公文式によりて、始めて認めらるに至りたれど、當時は未だ議會の設あらざりしたため、單に重要なものを法律とし、然らざるを勅令といへるに止まりしが、議會開かれてよりは、制定の手續に於て、法律は議會の協賛を要するものとなり、効力に於ては、法律を以て、勅令を變更することは得れども、勅令を以て、法律を變更することは得ざるものとなれり。

〔法〕合議裁判所の裁判長又は單獨判事が、訴訟の指揮、法廷の秩序の維持、又は裁判の執行に關し、口頭辯論を要せずして下す。一種の裁判。即ち書類の公示送達を命じ、審問を妨ぐる者、又は不當の行狀をなす者の退庭、拘留を命じ、又は判決の執行、正本の付與を命ずる類。刑事略式手續に於て、命令を以て、訴訟の本案につきて、裁判をなし、罰金又は料金を言ひ渡すが如きは、例外なり。法律に代るべき命令〔句〕「法」「法律

に代るべき勅令」に同じ。めいれい。明麗〔名〕明らかにしてうるはしきこと。「景色明麗」

めいれい。あん。命令案〔名〕命令の草案。めいれい。くわん。命令官〔名〕臣民に對して、命令を發する權限を有する官吏。即ち各省大臣、知事、郡長など。目しほらひめいれい。くわん。仕拂命令官の略。

めいれい。くわん。命令關係〔名〕「法」めいれい。くわん。權力關係に同じ。めいれい。けい。命令形〔名〕「語」命令法の用言の形。

めいれい。けん。命令權〔名〕「法」命令を發する權力又は權限。めいれい。けん。命令言〔名〕「語」命令法の用言。希求言。

めいれい。じやう。命令狀〔名〕次條に同じ。めいれい。じやう。命令書〔名〕命令を記載して受命者に交付する文書。めいれい。だう。明禮堂〔名〕みやうらいだう(明禮堂)に同じ。

めいれい。はふ。命令法〔名〕「語」用言の、命令、要求の意をあらはす場合の法。語尾變化の第六段を、そのまま、又は助辭「よ」を附けて用ふ。例「行け」「試みよ」「來よ」「よ」など。目「法」きやうかう(強行法)に同じ。こと。明白。

めいれい。めい。明瞭、明瞭〔名〕あきらかなるめいれい。き。明曆〔名〕漢書の律歷志に「大九章、而五紀明曆法」とあるに本づく。後西院天皇の御代の年號(紀元二二一五年—二二一八年)。

めいれい。たい。明曆の大火〔句〕みよひつわじ(振袖火事)に同じ。めいれい。いろ。目色〔名〕目の色ざし。めつぎ。めいれい。迷路〔名〕迷ひやすき道。方角の知りにくき道。目「羅」Labyrinth(迷宮)に同じ。

めいれい。迷廬〔名〕「佛」めいど(冥途)に同じ。海邊、地獄に落ちぬれば、冥路山さかし。諸曲(海志)冥路昏昏たり、我を引ふ人なし」

めいれい。迷路〔名〕「佛」めいど(冥途)の略。しほみせん(須彌山)に同じ。迷廬八萬〔句〕「佛」須彌山の高さ八萬四千由旬(ミナ)なること。廣義に迷廬八萬の頂よりなほ高さ父の御恩」

めいれい。迷樓〔名〕支那の隋の煬帝、これを建てしことありと傳へらる。めいきやう(迷宮)に同じ。めいれい。くわん。明六雜誌〔名〕次條を

めいれい。くわん。明六社〔名〕「明六は明治六年の略」明治六年、森有禮(西周)・西村茂樹・大槻文彦・加藤弘之・田中不二麿・津田真道・新次・中村正直・福澤諭吉・杉亨二・箕作(秋坪)等の組織せる團體。當時の新知識の淵源にして、翌七年、機關として、月二回發行の明六雜誌を出し、當時の諸新聞と相應じて、盛んに時事を評論し、自ら時代の先驅となりしが、八年の新聞紙條例の改正によりて、少からぬ壓迫を蒙り、遂に同年末に至りて廢刊せり。

めいれい。名論〔名〕すぐれたる議論。めいれい。わん。名王〔名〕「書經」に「百姓昭明、協和萬邦」とあるに本づく。御櫻町天皇の御代の年號(紀元二四二四年—二四三二年)。

めいれい。改正〔句〕第十五代の觀世太夫元章(元)が、明和年間、諸曲の從來の字句に改正を加へて出版せしこと。元章は、學識あり、この道に熱心なりしに、國學盛んなりし當時の風潮に驅られて、この舉ありしなれど、この人一代以後は、また行はれざるに至れり。されど、字句の誤を正し、諸曲を親密ならしめし功績は尠からずといふ。

めいれい。明和の大火〔句〕「目黒」行人坂の火事」に同じ。明和の變〔句〕明和三年、山縣大貳藤井右門等、尊王抑霸の説を唱へし一味の者、幕吏に逮捕せられて、獄に下り、大貳右門は死に處せられ、武内式部・織田信榮・織田信邦等連坐する者多かりし事蹟。『たる君王。すぐれ

めいれい。名王〔名〕名高き君。すぐれめいれい。明王〔名〕賢明なる君王。漢氏「明王の御代、四代をなん見はべりぬれど」

明王は一人のために、その法を枉げず、日月は、一物のために、その明を暗ます。『句』孝經の孔安國の註に出づ。公平・無私なる政治の形容。「語」廣義に「一人」不枉其法、日月爲一物不暗其明」といふ文あり。めいれい。明王鏡〔名〕くわんて(皇帝)に同じ。

めいれい。迷惑〔名〕「韓非子の説林篇」に「春往冬還、迷惑失路」とあり。道路に迷ふことあり。目「易林」に「異國殊俗、使心迷惑」とあり。心のまよふこと。平家「舞陽、全く謀叛の心無し、唯、田舎」の賤しきものに習って、皇居に馴れざる故に、心迷惑す」と申しければ。目厄介にて困ること。當惑。

めいれい。ごんめん。明和五匁銀〔名〕ごんめん(五匁銀)の異稱。めいれい。なんれう。明和南鐐二朱判〔名〕「明和九年九月(十一月)に至りて安永と改元す」の鑄造に係るよりいふ。あんえいなんれう(安永南鐐銀)に同じ。

めいれい。名位〔名〕「左傳」に「名位不同、禮亦異數」とあり。めいき(名器)参照。官位。名品。めいれい。明位〔名〕天武天皇の十四年正月に設定せられたる位階八級の中、最高のもの。親王に授與せらるるものにて、二階に分れ、毎階、大と廣との別ありて、明大一位・明廣一位・明大二位・明廣二位と呼びたり。後大寶令の制にては、親王の位階を一品より四品に至る四級と定め、明冠の四階といへり。

めいれい。名園・名苑〔名〕名高き庭園。めいれい。茗園〔名〕ちやあん(茶園)に同じ。

めいれい。茗園〔名〕ちやあん(茶園)に同じ。

めら

めう妙妙【名】言ふに言はれぬ程にすぐれてあること。甚だ巧なること。たへ。巧妙。極致。靈妙。和合入「現に見せたる醫術の妙、鼻高高と歸りゆく」【語】通とは違ひてあること。へん。ふしぎ。奇妙。【目】だいこく。梵妻。「る考案」

めうあんじ 妙安寺・妙安寺〔名〕前橋市
めうあんじ 妙安寺・妙安寺〔名〕

めういん 妙因・妙因【名】「佛」妙果の因。

めうとう 妙有〔名〕「佛」森羅萬象の非有非空なること。萬有の實相をいふ。（實有假有に對して）

めろろ

香を有す。生薬科ともいふ。
めうかくお 妙覺位・妙覺位〔名〕〔佛〕菩薩の五十二位の最後の位。佛果の地位。
めうがさう 蕤荷草〔名〕〔植〕やぶめうが(蕤荷)と同じ。
めうがたけ 蕤荷茸・若荷茸〔名〕蕤荷の花梗と嫩葉との俗稱。
めうがども 蕤荷巴・若荷巴〔名〕紋所の三箇の蕤荷を、三巴の如き狀に組み合はせたるもの。
めうがのて 蕤荷子〔名〕蕤荷の花序の作り植えてある畑。
めうがひ 蕤荷菱・若荷菱〔名〕だきめうがひ(抱蕤荷菱)と同じ。
めうき 妙機・妙機〔名〕氣運の微妙なる變化。〔佛〕微妙の感應を受くべき、微妙の機根。
めうき 妙技・妙技〔名〕甚だすぐれたる技術。微妙なる腕前。妙術。
めうき 妙妓・妙妓〔名〕妙齡の妓女。
めうき 容貌・容貌のすぐれたる妓女。
めうきあん 妙喜庵〔名〕山城國乙訓郡大山崎村にある茶室。千利休の作と傳へ、二疊敷になほ一疊附屬し、床間(ふし)は洞床(ふし)で、有合の材料を用ひて造りたる代表的且つ最古の茶室と稱せられ、特別保護建築物たり。又、芝山手鉢鉢松共(ふし)に有名なり。梅園(ふし)山崎路に出でて、……妙喜庵をとぶらふ。あるじ、折敷(ふし)にくだ物盛りて、薄茶(ふし)出せり。豊太閣の遊びたまひし所とて、なほ、その名残とどまれる數寄屋の様など、なつかしき庵なり。
めうきさん 妙義山・妙義山〔名〕〔地〕上野國北甘樂(ふし)郡・碓氷(ふし)二郡に跨れる山。上野の三山の第一。白雲(ふし)・金洞(ふし)・金雞(ふし)の三峯に分れ、白雲山は最北に位して、高さ三五六七尺、金洞山は三峯中最も高く、高さ三六四三尺、東方より望めば、他の二峯の間に見ゆるより、中岳の稱あり、山容の奇秀も、亦三峯中の最たり。金雞山は最も低く、高さ二八二五尺、

めろろ

山姿奇觀に富む。東方の山腹に妙義町ありて、白雲山へ一里弱、金洞山へ一里十町、金雞山へ二里。
めうきさん 妙義神社・妙義神社〔名〕上野國北甘樂(ふし)郡妙義山東方の山麓妙義町に鎮座せる神社。祭神は日本武尊といふ。
めうき 妙吉〔名〕〔動〕ほ(龜)を云ふ。
めうき 妙龜塚〔名〕東京市淺草區橋場(ふし)なる總泉寺門前、即ち古の淺茅(ふし)ヶ原に在る、梅若丸の母妙龜尼の塚。
めうきやう 妙境・妙境〔名〕甚だすぐれたる地。〔佛〕妙所に同じ。
めうきやう 妙經・妙經〔名〕佛・妙法を説ける經典。佛經の義理深遠なるを形容して、いふ語。妙典。諸典(妙經)と風と共に聲立てて、この妙經を讀誦(ふし)する。
めうきやう 妙行・妙行〔名〕佛・甚だすぐれたる行法。眞如の妙理に契應する、佛法の如實の修行。廣義(妙行)に至るまで、その妙行、片時も懈る事無うして。
めうきやう 妙行寺〔名〕尾張國愛知郡織豊(ふし)村にある法華宗の寺。加藤清正の開基。
めうきやう 妙曲・妙曲〔名〕甚だすぐれたる音曲。又は歌曲。
めうき 妙句・妙句〔名〕巧妙なる文句。
めうき 妙果・妙果〔名〕佛・たへなる證果。妙因によりて達する、殊にすぐれたる結果。即ち佛果をいふ。盛衰(妙果)來世證・妙果於一佛之土。
めうきやう 妙光・妙光〔名〕靈妙なる光。諸曲(妙光)・目前の妙光の影、この舍利に如くはなし。
めうきやう 妙光山・妙光山〔名〕〔地〕めうかうさん(妙高山)に同じ。
めうきやう 妙光寺〔名〕さうげんじ(藻原寺)を見よ。
めうきやう 妙觀〔名〕人・鎌倉期の彫刻師。從弟、妙觀が刀は、いたく立たず。朝衣(須臾(妙觀)つればれのすきびに、自ら妙觀が刀をもて、これに覆へるものつくり。
めうきやう 妙觀・妙觀〔名〕佛・四智生の一。諸法圓融の妙理を觀察し、又能く衆生の根性を知り、妙法を演説して、之を開導する智慧。
めうきやう 妙觀派・妙觀派〔名〕禪宗法師の一方(妙觀)の一派。井口相一を祖とするもの。名官派(妙觀)。
めうきやう 妙偈・妙偈〔名〕佛・すぐれたるもの。名官派(妙觀)。
めうきやう 妙計・妙計〔名〕すぐれたるはかりごと。巧妙なる計略。妙算。妙算。
めうきやう 妙教・妙教〔名〕佛・たへなる教。佛教の義理深遠なるを形容していふ語。妙法。〔南無妙法蓮華經に説ける教。〕
めうきやう 妙教寺・妙教寺〔名〕備中國吉備(ふし)郡高松町にある日蓮宗の寺。報恩大師の古跡にして、中世兵火のために荒廢し、豊臣秀吉高松城攻撃の時、殆どその跡を絶つに至りしを、僧日圓(ふし)その遺跡を得て、この寺を建つ。稻荷山と稱し、寺内に鎮座せる最上位經王大菩薩は、俗に最上稻荷と呼ばれて、世に聞ゆ。
めうきやう 妙訣・妙訣〔名〕甚だすぐれたる方法。靈妙なる秘訣。〔の方言〕
めうきやう 妙見・妙見〔名〕佛・〔奥州・妙見〕菩薩の一。國土を護り、貧窮を諸願を成就せしむといふ北斗星の本に地。我國では、東密・台密共に大いにこれを供養し、中古以來、日蓮宗にて、特に尊崇し、諸國に妙見堂多く存するも、これがためなり。
めうきやう 妙見菩薩・妙見菩薩〔名〕北辰菩薩。(妙見大土の稱は、東寺にて用ひ、尊星王の稱は、寺門派にて専ら用ふ)。
めうきやう 妙玄・妙玄〔名〕書・めうきやう(妙法蓮華玄義)の略。
めうきやう 妙見・妙見〔名〕佛・



(ん け う め)

めろろ

そんならうらうら(尊勝王法)に同じ。
めうきやう 妙見講・妙見講〔名〕妙見菩薩の信者の組織する講中。太功(妙見)近づきながら、妙見講を勤めるとは、よい手まはし。
めうきやう 妙見山〔名〕〔地〕攝津國豐能(ふし)郡の北部にある山。東郷(ふし)村に屬し、京都より九里、大阪より八里、麓より頂上まで十六丁、頂上に妙見堂あり、能勢(ふし)の妙見といひ、賽者多し。
めうきやう 妙見父・妙見父〔名〕城崎(ふし)三郡に跨れる山。樹木鬱蒼、舟人の目標たり。山中、妙見杉と稱する良材を出す。山上に妙見堂あり。
めうきやう 妙顯寺・妙顯寺〔名〕京都府上京區小川頭にある日蓮宗の寺。同宗四大本山の一。又、京都十六本山の總統たり。日蓮の法孫肥後阿闍梨日像(ふし)後醍醐天皇より、御溝の傍に、安居の地を賜はりて、道場を設けしに始まる。天文五年、叡山の徒に焼かれて、二條の地に移り、文祿二年、更に今の地に移る。塔頭(ふし)寺坊多し。
めうきやう 妙顯寺・妙顯寺〔名〕日蓮の弟子天目の創建。〔武藏國北足立(ふし)郡戸田(ふし)村にある日蓮宗の寺。文永年間、武州新倉(ふし)の領主圓田五郎時光日蓮に歸依し、邸を捨てて寺とせしもの。長誓山と稱し、至徳元年今の地に移る。〕
めうきやう 妙見杉〔名〕めうきやうさん(妙見山)を見よ。
めうきやう 妙見大士・妙見大士〔名〕佛・めうきやう(妙見)に同じ。
めうきやう 妙見堂・妙見堂〔名〕妙見を祀れる堂。都鄙到る所に在れども、攝津國豐能(ふし)郡能勢に在るものは、我國に於ける妙見信仰の中心たる觀あり。
めうきやう 妙見菩薩・妙見菩薩〔名〕佛・めうきやう(妙見)に同じ。
めうきやう 妙見山〔名〕〔地〕もと三宅(ふし)山と稱せしを、妙見の音と相近きより、妙見を祀りて、名を改めしなり。河内國北河内郡星田村の南にある丘陵。山

めう

上に妙見堂あり。

めうこ 妙語妙語【名】微妙なる言語。

めうこ 妙悟妙悟【名】「佛」微妙なるさと

めうこ 妙好妙好【名】「佛」甚だす

れてうるはしきこと。

めうこ 妙好高貴の相【句】「佛」佛身の、

三十二相八十種好を備へて、端嚴の

微妙【句】一も缺けたる所なきこと。

衆芳丈六の阿彌陀如來、……、妙好高

貴の相は、形體にあり。

めうこ 妙興寺妙興寺【名】下總國

千葉郡白井村長野呂にある日蓮宗の寺。四

十四本山の、長野山と號す。建治元年の

開創。開山は日蓮の弟子中老僧の一人日

合。第二十一代日講不受不施を唱へ、幕府

の忌諱に觸れてより、昔日の繁榮を失ふ。

めうこ 妙好人妙好人【名】「佛」

「散善義に、若念佛者、即是人中好人、人中

妙好人、人中上人、人中希有人、人中最

勝人」とあるに本づく」すぐれてよき人。

阿彌陀の本願に歸依して、念佛する行者

を稱へていふ。

めうこ 妙國寺妙國寺【名】武藏

國荏原郡那品川町にある顯本法華宗の

寺。開祖は日蓮の弟子天目。天目は始め

て本迹【句】勝劣の義を唱へし人にて、品

川に住し、後年、弟子日觀、その舊廬を興

し、天目を推して開祖とす。鳳凰山と號

す。【攝津國堺市材木町にある日蓮宗

の寺。四十四本山の一。開祖は京都頂妙

寺の日親父は堺の油屋常吉。廣布山と

稱す。境内に蘇鐵の大樹ありて有名なり。

めうこ 妙嚴寺妙嚴寺【名】三河國

寶飯郡郡豊川町にある曹洞宗の寺。開

山は東海義興。義興別に、境内に叱根尼

【句】天堂を築きて、繁榮し、織田信長豊

臣秀吉徳川家康等、皆、これに歸依祈願

し、爾來豐川稻荷として名高く、明治九年

めう

るかんがへ。微妙なる思想。妙思。

めうこ 妙策妙策【名】めうけい妙計

に同じ。

めうこ 妙算妙算【名】前條に同じ。

めうこ 牝牛【名】女性の牛。めすの牛。

めうこ 牝牛【名】對して

牝牛に腹突かる【句】「牝牛は、角曲

りて、人を傷け得べきものならぬより

いふ」意外の出來事のために、害を受

くる譬。著圖「女牛に腹突かれたる心

地して」。

めうこ 妙旨妙旨【名】甚だすぐれたる

むね。微妙なる旨趣。

めうこ 妙思妙思【名】めうさう妙想に

同じ。

めうこ 苗字苗氏【名】みやうじ【名字】に

めうこ 妙色妙色【名】「佛」梵沙

【句】蘇樓波の譯語。微妙不可思議なる色

相【句】

めうこ え妙色衣妙色衣【名】「法

ほえ【法衣】の美稱。釋迦如來誕生會「天津

繪【句】の妙色衣」。

めうこ 妙質妙質【名】甚だすぐれた

めうこ 妙身妙身【名】「佛」たへなる

身。微妙不可思議なる身。「無漏【句】法

性【句】の妙身」。

めうこ 妙心妙心【名】「佛」微妙不可

思議なる心。天台宗の判釋に依れば、別

教にては、如來の眞心を指していひ、圓教

にては、直ちに凡夫の妄心を指していふ。

めうこ 妙心寺妙心寺【名】山城國

葛野郡那花園村にある臨濟宗妙心寺派

の大本山。本尊は釋迦如來。脇侍阿難迦

葉【句】。開山は無相大師關山惠玄。正法

山と號す。開山は無相大師關山惠玄。正法

宮を捨てて、寺となしたまひしもの。應

仁の兵火に罹りしが、宗深禪師、後土御門

天皇の勅を奉じて、舊觀に復せしめ、宏壯

めう

めうこ 妙莊嚴妙莊嚴【名】

「佛」法華經に、過去無數劫の昔、初は、外

道【句】婆羅門の教を信じて、邪見なりし

が、夫人淨徳、二子淨藏淨眼【句】と共に

種種の方便を設けて、その心を鎮ましめ、

遂に雲雷音宿王華如來と呼ぶ佛の計に詣

て、法華經を聞き、共に妙益を得たりと

記せる國王。百億劫、一子出家の功力【句】

によつて、妙莊嚴の悟を得」。

めうこ 妙莊嚴王妙莊嚴王【名】妙莊嚴

王【名】「佛」前條に同じ。 飛空淨藏淨

眼【句】の往還遊行【句】したまひけんを

見たまひてよりこそ莊嚴王も、心きよき

三昧どもを勤めたまひて」。

めうこ 妙莊嚴王品妙莊嚴王品【名】

妙莊嚴王品【名】「書」次條の略。

めうこ 妙莊嚴王本妙莊嚴王本【名】「書」

王本妙莊嚴王本妙莊嚴王本【名】「書」

法華經二十八品【句】中の第二十七品。妙

莊嚴王の本來事蹟を説けるもの。

めうこ 妙成寺妙成寺【名】能登

國羽咋【句】郡上甘田【句】村にある日蓮

宗の寺。四十四本山の一。もと眞言宗な

りしが、永仁中、住僧清月阿闍梨、日蓮の

法孫日像の説を聞きて、改宗し、

めうこ 妙手妙手【名】甚だすぐれた

る伎倆、又その伎倆を有せる人。巧手。

めうこ 妙趣妙趣【名】甚だすぐれた

るおもむき。微妙なる旨趣。妙味。妙致。

めうこ 妙宗妙宗【名】「佛」微妙

なる宗旨。【めうこ】妙法【句】の義を取

りていへるなるべし」にちんしゅう【日蓮

宗】の自稱。

めうこ 妙術妙術【名】甚だすぐ

れたる技術。【めうこ】甚だすぐれたる手段。

めうこ 妙純寺妙純寺【名】相模

國愛甲郡依智【句】村にある日蓮宗の寺。四

十四本山の一。日蓮、龍口【句】の難を免

めう

めうこ 妙所妙處妙所妙處【名】甚

だすぐれたる點。妙境。佳境。

めうこ 離白【名】磨白【句】又は礪白【句】

の、二つの石の下の方。【離白】に對して

めうこ 妙照寺妙照寺【名】佐渡國

二宮【句】村市之澤にある日蓮宗の寺。四

十四本山の一。日蓮、佐渡に配流中の謫

居の地に、その教に歸依して改宗せし日

靜の建立せしもの。妙法華山と號す。山

號寺號共に日蓮の命ぜし所なり。

めうこ 妙跡妙跡妙跡妙跡妙跡妙跡【名】

蹟【名】めうこ【妙筆】に同じ。

めうこ 妙說妙說【名】すぐれたる言

說。【めうこ】に同じ。

めうこ 妙絕妙絕【名】ぜつめう絶妙

めうこ 妙泉寺妙泉寺【名】山城國

愛宕郡那松ヶ崎村にある日蓮宗の寺。

松崎山と號す。もと天台宗にて、歡喜寺と

號せしが、永仁の頃、住僧實眼、日蓮の法

孫日像の説を聞きて改宗し、一村、皆、日

像の門徒となり、寺號をも改む。だいも【句】

ざり【題目】めうこ【妙法】參照。

めうこ 妙宣寺妙宣寺【名】佐渡國

眞野村阿佛房にある日蓮宗の寺。四十四

本山の一。日蓮、佐渡に流謫中、その偉徳

に服して、これに歸依せし阿佛房の、日蓮

の教されて歸りし後、自己の家を改めて

寺とせしもの。蓮華王山と號す。

めうこ 妙足妙足【名】蹴鞠に巧な

ること。近代世襲、この人、近世の妙足

なり」。

めうこ 馬道【名】めうこ【馬道】の音便。

十訓【句】の宮に參りて、めうこ【う】に

たたまけるに」。

めうこ 妙道【名】殊にすぐれたる悟

道。驚歎無上の妙道に因みて、出離に

進まん」。

めうこ 目打【名】【めうこ】まひごし【千枚

めう

めうこ 妙所妙處妙所妙處【名】甚

だすぐれたる點。妙境。佳境。

めうこ 離白【名】磨白【句】又は礪白【句】

の、二つの石の下の方。【離白】に對して

めうこ 妙照寺妙照寺【名】佐渡國

二宮【句】村市之澤にある日蓮宗の寺。四

十四本山の一。日蓮、佐渡に配流中の謫

居の地に、その教に歸依して改宗せし日

靜の建立せしもの。妙法華山と號す。山

號寺號共に日蓮の命ぜし所なり。

めうこ 妙跡妙跡妙跡妙跡妙跡妙跡【名】

蹟【名】めうこ【妙筆】に同じ。

めうこ 妙說妙說【名】すぐれたる言

說。【めうこ】に同じ。

めうこ 妙絕妙絕【名】ぜつめう絶妙

めうこ 妙泉寺妙泉寺【名】山城國

愛宕郡那松ヶ崎村にある日蓮宗の寺。

松崎山と號す。もと天台宗にて、歡喜寺と

號せしが、永仁の頃、住僧實眼、日蓮の法

孫日像の説を聞きて改宗し、一村、皆、日

像の門徒となり、寺號をも改む。だいも【句】

ざり【題目】めうこ【妙法】參照。

めうこ 妙宣寺妙宣寺【名】佐渡國

眞野村阿佛房にある日蓮宗の寺。四十四

本山の一。日蓮、佐渡に流謫中、その偉徳

に服して、これに歸依せし阿佛房の、日蓮

の教されて歸りし後、自己の家を改めて

寺とせしもの。蓮華王山と號す。

めうこ 妙足妙足【名】蹴鞠に巧な

ること。近代世襲、この人、近世の妙足

なり」。

めうこ 馬道【名】めうこ【馬道】の音便。

十訓【句】の宮に參りて、めうこ【う】に

たたまけるに」。

めうこ 妙道【名】殊にすぐれたる悟

道。驚歎無上の妙道に因みて、出離に

進まん」。

めうこ 目打【名】【めうこ】まひごし【千枚

めうち

を打つ。目刺繻にて、最も必要且つ極めて便利なる道具。鐵にて長刀(六)様の形に作りたるもの。縮ひたる糸を一一縮めて、糸を布地になづまするにも、又、糸を縫るにも用ふ。〔同じ。〕

めうち 妙致・妙致〔名〕めうしゆ・妙趣にめうち 妙智・妙智〔名〕「佛」智の不可思議なるをたてていふ語。

めうちき 妙ちき・妙ちき〔名〕「めうてき」(妙適)の轉訛なりといふ。めう(妙)に同じ。〔俚語〕

めうちきりん 妙ちきりん・妙ちきりん〔名〕前條に同じ。

めうちくりんわしちへんじん 妙竹林話七偏人〔名〕「書」支那の「竹林の七賢」の意を含め、妙竹林に前條の「妙ちきりん」の意をも含めて名づけたるもの。しち(七)偏人(七偏人)に同じ。

めうちたかね 目打鑿〔名〕彫刻家が、龍獅子など、動物の睛(め)などを彫るに用ふる、細き鑿。

めうつじ 目移〔名〕目の著けどころを變へて、他を見ること。すぐれたる物事の方に目を移すこと。源氏玉をみがける目うつしに、心もとまらねど。〔榮花〕わが方さまは、何事もさだ過ぎ、うちとけあやしき目うつしに、花花とめてかしづき。めうつじ 目移〔名〕目の著けどころの、あれこれと、さまざまに移り變ること。すぐれたる物事の方へと、次第に目の移りゆくこと。〔源氏玉をみがける目うつしのこと。〕〔榮花〕よるづに口をしき目うつりの、いとどしきなめりかし。〔傾城反響香〕女中の色に目うつりして。めうてき 妙的・妙的〔名〕めうちき・妙ちき(き)に同じ。〔俚語〕

めうてき 妙適・妙適〔名〕「理趣經」に「所謂妙適清淨句」とあり。微妙にして、自然の道に適(あ)ひ順ふこと。めうてん 妙典・妙典〔名〕「佛」めうぎやう(妙經)に同じ。太平記上人、寂滅(じやくめつ)の扉におはしまして、妙典を讀誦(どくじゆ)したまひける時。めうてんじ 妙傳寺・妙傳寺〔名〕京都市

めう

上京區北門前町にある目蓮宗の寺。四十四本山の一。永正十六年、身延(みん)山第十二代、日意の開創。第十一代日朝の鎌倉に開きたる本覺寺を、東身延といふに對して、俗に、西身延の稱あり。

めうと 女夫・妻夫夫婦〔名〕めとと女夫の音便。

めうと 芽獨活〔名〕芽の萌え出でたる時の獨活。芭蕉、雪間より薄紫の芽獨活かな。めうと 妙土・妙土〔名〕「佛」佛の報土(ほうど)の微妙なるをたてていふ語。

めうとあひ 女夫合妻夫合夫婦合〔名〕めととあひ(女夫合)の音便。〔俗曲十二段者が色香〕圍碁……、白と黒とは夜と晝、二人(ふたり)陰陽、めうと合(あ)ひ。めうとあひさかひ 女夫諍〔名〕めととあひさかひ(女夫諍)に同じ。新版歌文「まだ祝言をせぬ先から、めうといさかひの取越かいやい」。めうどう 妙幢・妙幢〔名〕「佛」すぐれたる法幢。金光明最勝王經の夢見鼓懺悔品に、婆羅門の妙金鼓を撃つを夢み、聲の中に、如來の眞實の功德と懺悔の法とを明かにし得たりとて、鷲峯山(じゆふざん)に詣りて、佛に語りし菩薩。依りて、夢を支配する功德ありと稱せらる。めうどうばさつ 妙幢菩薩・妙幢菩薩〔名〕「佛」前條に同じ。〔讀曲與服〕夢の精靈妙幢菩薩も影向(かげむかひ)なりたる夜もすがら。めうとがらす 女夫烏・妻夫烏・夫婦烏〔名〕めととがらす(女夫烏)の音便。

めうとぎつね 女夫狐・妻夫狐・夫婦狐〔名〕めととぎつね(女夫狐)の音便。

めうとく 妙德・妙德〔名〕甚だすぐれたる德。明德。高德。

めうとくき 女夫釘・妻夫釘・夫婦釘〔名〕めととくき(女夫釘)の音便。

めうとご 女夫子・妻夫子・夫婦子〔名〕めととご(女夫子)の音便。

めうとごご 女夫事・妻夫事・夫婦事〔名〕めととごご(女夫事)の音便。

めう

めうとさし 女夫差・妻夫差・夫婦差〔名〕めととさし(女夫差)の音便。

めうとじよたい 女夫世帶・妻夫世帶・夫婦世帶〔名〕めととじよたい(女夫世帶)の音便。

めうとすみ 女夫住・妻夫住・夫婦住〔名〕めととすみ(女夫住)の音便。

めうとづか 女夫塚・妻夫塚・夫婦塚〔名〕めととづか(女夫塚)の音便。

めうとづれ 女夫連・妻夫連・夫婦連〔名〕めととづれ(女夫連)の音便。

めうとなか 女夫仲・妻夫仲・夫婦仲〔名〕めととなか(女夫仲)の音便。

めうとねんぶつ 女夫念佛・妻夫念佛・夫婦念佛〔名〕めととねんぶつ(女夫念佛)の音便。

めうとびな 女夫雛・妻夫雛・夫婦雛〔名〕めととびな(女夫雛)の音便。

めうとぶね 女夫船・妻夫船・夫婦船〔名〕めととぶね(女夫船)の音便。

めうとぼし 女夫星・妻夫星・夫婦星〔名〕めととぼし(女夫星)の音便。

めうとまげ 女夫髻・妻夫髻・夫婦髻〔名〕めととまげ(女夫髻)の音便。

めうとまつ 女夫松・妻夫松・夫婦松〔名〕めととまつ(女夫松)の音便。

めうとまご 女夫窓・妻夫窓・夫婦窓〔名〕めととまご(女夫窓)の音便。

めうとわかれ 女夫別・妻夫別・夫婦別〔名〕めととわかれ(女夫別)の音便。

めうとねん 妙年・妙年〔名〕めうれい(妙齡)に同じ。

めうはい 廟拜・廟拜〔名〕べうはい(廟拜)の方法。妙計。妙跡。妙跡。妙跡。めううひつ 妙筆・妙筆〔名〕甚だすぐれたる筆跡。妙筆。妙筆。妙筆。めううひん 妙品・妙品〔名〕三品(さん)の一。神品に次ぎてすぐれたるもの。めううふ 妙舞・妙舞〔名〕すぐれたる舞。めううぶん 妙文・妙文〔名〕甚だすぐれたる文辭。めうもん。めうへ 目上〔名〕階級・地位又は親等な

めう

どの關係上、己より高く尊きこと、又その人。尊長。(目下に對して)。

めうほけじ 妙法華寺・妙法華寺〔名〕伊豆國田方郡錦田村にある日蓮宗の寺。四十四本山の一。弘延山と稱す。日蓮の高足日昭、鎌倉に開創せしものなれど、天文七年、北條氏康・上杉憲氏に破られて、越後に走りし後、第十二代日弘第十三代日南共に上杉氏と姻戚の關係ありしたため、北條氏の迫害を受け、越後國村田の妙法寺に假寓し、更に末寺なる伊豆國の妙國寺に合同し、元和七年、今の地に移る。寺境幽邃を極む。

めうほふ 妙法・妙法〔名〕「佛」梵(ぼん)のadharma(薩達刺摩)の譯語。佛法の、義理深遠なるを形容していふ語。妙教。妙法蓮華經に説ける一乘の法をたてていふ語。山城國松ヶ崎なる妙泉寺にて、毎年八月(昔は陰曆七月十六日の夕、送火とて、西山に「妙」の字、東山に「法」の字を點火すること、如意ヶ嶽の大文字「妙」の如くすること。「妙」の字は日像、「法」の字は日良の畫せし所。

妙法一味の玉〔句〕「佛」法華經の一乘の妙法を、玉の珍重すべきに譬へていふ語。〔讀曲愛宕空也〕餘經の瓦礫を捨てて、妙法一味の玉を拾はんがために。妙法の五字〔句〕「佛」だもんく(題目)五字を笠(かさ)するしに書きければ。〔じ。妙法の火(く)めうほふ(妙法)に同じ。妙法緊那羅王〔名〕「佛」四種の緊那羅王の一。〔讀曲春日龍神〕その外、妙法緊那羅王、又、持法緊那羅王。めうほふきやう 妙法經・妙法經〔名〕「書」めうほふきやう(妙法蓮華經)の略。著聞慈覺大師、妙法經書きける時。めうほふけ 妙法華・妙法華〔名〕「佛」めうほふけ(妙法蓮華)の略。太平記、令講讀妙法華。めうほふけ 妙法偈・妙法偈〔名〕「佛」妙法を説きたる偈。妙偈(めう)。

本單位にメガ(百萬倍)・ミリヤ(一萬倍)・キロ(一千倍)・ヘクト(百倍)・デカ(十倍)

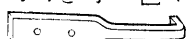


(るこえめ
ぶつこ

無き子を置きたらん心地して」
めじか牝鹿〔名〕めじか(牝鹿)に同じ。(牝)

めかけ。目掛・妾〔名〕『目を掛くる義』で
かけ。側室。せふ。一代女「殿様、お目掛

あけ狭き方の端に瓜を設けて釣らんとする木に差し込むもの。



(ひがすかめ)

めえとる

能力

おかし

をゑぬわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

めかそ

めかね

めかはら

めかり

めかそ「名」植「目」むらさき「小紫」に同じ。
めかた「目方」名「秤目」にあらはるる物の重量。おもき。貫目。

めかた「妻方」名「妻」の家の人。「古語」葦葦君達は、花やかに、御めかたのさし添ひてもてかしづきたまふこそ、今めかしけれ」

めかた「雌型」名「形」あふけい「四型」に同じ。「雄型に對して」

めかた「女敵」名「己が妻の姦夫。蘇敵」あれ體「の」下衆「め」を、三五兵衛が女敵といふも、惜しい」

めかた「女敵討」名「己が妻の姦夫を討ち取る」

めかち「目かち」名「めかち」目かち」に同じ。

めかち「目勝」名「花ガルトにて、三人の内、最も多く数を取りたるもの」

めかち「女桂」名「桂」に同じ。和名桂、女加豆良」

めかち「目鑿」名「顔面の上半部の大きな紙に、生際」

めかち「目」見分るる力鋭し。義經「人の親の目か堅かりけり」

めかち「目」目つき鋭し。洞察力鋭く、百日後我「祈經」もとより目かど強く、……眞直に白狀、白狀、……とぞ睨目角を立つ「句」目角「を立つ」

めかち「目」目角「目の端、即ち目頭」目と目尻。保馬爲朝は、七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが」

めかち「目」見分るる力鋭し。義經「人の親の目か堅かりけり」

めかち「目」目つき鋭し。洞察力鋭く、百日後我「祈經」もとより目かど強く、……眞直に白狀、白狀、……とぞ睨目角を立つ「句」目角「を立つ」

めかち「目」目角「目の端、即ち目頭」目と目尻。保馬爲朝は、七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが」

めかち「目」見分るる力鋭し。義經「人の親の目か堅かりけり」

めかち「目」目つき鋭し。洞察力鋭く、百日後我「祈經」もとより目かど強く、……眞直に白狀、白狀、……とぞ睨目角を立つ「句」目角「を立つ」

めかち「目」目角「目の端、即ち目頭」目と目尻。保馬爲朝は、七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが」

めかち「目」見分るる力鋭し。義經「人の親の目か堅かりけり」



目廉に取る「句」物事の廉「を、し」と認む。

めかね「眼鏡自鏡」名「視力を強め、又は保護するために、硝子にて、左右の眼を蔽ふやうにしたもの。近視眼には凹レンズ、遠視眼又は老眼には凸レンズ、亂視には圓柱形の硝子を装ひ、又、眼に入る光線を弱むるには、青色又は薄藍色の色硝子を用ひなす。がんきやう。和漢三才圖會「眼鏡、鑲、女加補」

めかね「眼鏡」名「徳川時代に、武家の老女など、の間に流行はれし、髪に結ひ方の一。目めき「目利」に同じ。甲陽軍鑑「太刀にも、刀にも、目がねといふ事、專一に候」

めかね「眼鏡が狂ふ」名「人物を見損ふ。鑑定しそこなふ」

めかね「妻料」名「かねて、妻とすべく定めたる人。古語」空鳥掛き身にはありとも、おのがめかねを人に欲「せしめてはありなや」

めかね「眼鏡石」名「つばいし「鑲石」

めかね「眼鏡魚」名「動」みじき「三島」に同じ。

めかね「眼鏡越」名「物を見るに、眼鏡をかけたままにて、額をやや下に向く、上眼の」を使ひて、眼鏡の上よりうかがふこと。

めかね「眼鏡師」名「眼鏡を製造するもの」

めかね「眼鏡違」名「品物又は人物などの良否を見分けそこなふこと。めちがひ。めきちがひ。八笑人「それは、大きにお眼鏡違でござります」

めかね「眼鏡橋」名「底部のアーチをなせる橋。拱橋」西遊記「長崎の橋は、すべて唐風」の作りやうなり。兩岸より切石を積み上げて、橋代なしに架けわたせる石橋なり。……長き橋は、二筋に水を通ずるなり。これを目がね橋といふ。……まんせいばし「萬世橋」を見よ。

めかね「眼鏡蛇」名「動」こらに同

めかね「眼鏡屋」名「眼鏡を造り又は賣る家、又はその人」

めかね「眼鏡蛇」名「動」こらに同

めかね「眼鏡屋」名「眼鏡を造り又は賣る家、又はその人」

めかね「眼鏡蛇」名「動」こらに同

めかね「眼鏡屋」名「眼鏡を造り又は賣る家、又はその人」

めかね「眼鏡蛇」名「動」こらに同

めかね「眼鏡屋」名「眼鏡を造り又は賣る家、又はその人」

めかはら「牝瓦」名「屋根に葺く時、上を向けて、牡瓦」と喰ひ違はせておく瓦。和名「越、加波良、牝瓦」ひらがな、女めかはり「目變」名「さめ」白「眼」に同じ。

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

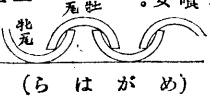
めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」

めかね「和布蕪」名「次條に同じ。運歩色蕪集和布蕪、メカブ」



めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかり「和布刈」名「和布」など、食用の海藻を刈り取ること。「海布刈」

めかる

めかる 目離る「動下二目」逢ひ見るこ
と遠ざかる。「古語」萬葉佐保過ぎて奈良
の方向(ふ)におく幣(は)は妹を目かれず
あひ見しめとぞ。 笠原明暮目かれずか
しづき奉らせたまひて。 一條を見よ。
めかるかば 目登る蛙「句」め(目)の
め(る)かや 雌刈萱「名」(植)かるかや(刈
萱)に同じ。(雄刈萱に對して)
めかれ目離「名」目かるること。「古語」
伊勢思ふども身をわかれねば目かれせぬ
雪のつもるぞわが心なる。
めき「貌」めきりに同じ。めきめき参照。
めき女木「名」雌雄異株の植物に於
ける、雌花のみを具へたる方のもの。(男
木)に對して。「雌木」。「大麻」の雌花
のみを具へたる方のもの。(男木)に對
して。「雌木」。「目木の食合(め)にて、四
状をなす方のもの。(男木)に對して」
「大工の語」
めき小葉「名」(植)「目木の義。洗眼藥
に用ふるよりいふ」小葉科に屬する落葉
灌木。高さ五六尺乃至一丈餘に達し、樹
皮は暗灰色にして、縦に割目あり。枝には
隆起せる線條あり。葉は、小くして、倒卵
形全縁。數箇葉生し、その下方に、葉の變
形せる一箇の針あり。花も小くして、花
瓣は六枚、帶黃白色を呈し、雄蕊は、他物
に觸るれば、自ら動く性あり。長楕圓形
の漿果を結び、熟すれば、紅色となり、翌
年の春、黒變す。我國、山野に自生し、材
は、黃色、堅緻にして、寄木細工に用ひら
れ、樹皮は、粗皮を去りて、黃色の染料と
すべく、又、枝葉は、乾かして、洗眼藥と
す。ことりとまらず。ことりすわらず。よ
ろひどほし。こがねぞんじゆ。
めき目利「名」書畫・刀劍など物品の
眞贋・良否又は人物の善惡を見別けるこ
と、又その人。めがね。鑑識。甲陽軍鑑「人
の相(あ)をよくなされて、尤もなり」
目利千人、盲千人「句」「目明(め)千
人、盲千人」に同じ。「諺語」
めきき「がしら」目利頭「名」目利をする
人人の主要なる者。五人女もしも、我等

めききだ

が目に、美しきと見しもある事もやと、役
者の賢きやつを目利頭に、花見がへりを
待つ暮暮」
めききだて 目利立「名」たて(立)は接
尾語「目利の上手なることを誇り示すこ
と。新水代爲商人の慣むべきは、短氣朝
寝色ぐるひ……目利立 藝自慢……こ
れらは、まづ無用たるべし」。「同じ」
めきたな 目機「名」はらみさん(孕女に
めきき)ちがひ 目利達「名」目利の中(め
らぬ)こと。めがねちがひ。鑑定ちがひ。
二代男「これは、宇佐賀の森の神主も目
利ちがひあるべし」
めきくわ 小葉科「名」(植)顯花植物、被
子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。多年生
の草又は木にて、九屬凡そ百五十種を含
み、溫帶地方に産す。せうはくくわ。
めきき 墨西哥・墨西哥「名」(地)北亞
米利加洲の一共和國。首府もメキシコと
いふ。のびすばん(濃尾數郡)参照。
めききこどる 墨西哥其弗・墨西哥弗「名」
墨其國の大なる銀貨。價格一ペソにして、
品質・純分、殆ど我國の舊一圓銀貨に同じ
く、西曆一九〇五年、同國の金貨本位制に
改められし以前、盛んに本邦方面に輸出
せられ、今も、海峽植民地及びその附近
又、支那等に流通し、支那人は鷹洋或は英
洋と呼ぶ(鷹は、西班牙の國旗の紋章なる
鷹を刻せるに因るものにて、英は、支那
音、鷹と通ず)。
めききこわんりう 墨西哥灣流・墨西哥
灣流「名」(地)わんりう(灣流)に同じ。
めききしやき「貌」詰開(め)するさま。膝
栗毛(こ)こ(一)行(て)、めきしやきとせりふ
せにや、おかんわいの」。「に同じ」。
めききのき 小葉木「名」(植)めき(小葉)
めきみ 女君「名」女の敬稱。源氏女君
は、すこしすぎたまへる程に、いと若う
おはす、物のなきけありて」
めきめき「貌」めきを重ねていふ語「
めく参照」物のこはれ損はるる音。めり
めり。みりみり。聖徳太子傳記「屏、しわっ

めきり

て、めきめきめき」。「めきり(滅切)に同
じ。佛語翻經後考「めきめきと年を寄せ
たる芭蕉かな」
めきり 目切「名」めたて(目立)に同じ。
一代男「通(と)の底入(め)」、引白の目切、そ
の隣は鉢たき」
めきりめきり「貌」めきめきに同じ。
めく「名」めくら(じま)首綱の略。「めくの
股引」
めく「接尾」その様子に見ゆる意。土佐「あ
やしく歌めきてもいへるかな」小島「口
やふ」目馴れぬ戎衣(め)の上人(め)ど
ものけしき武士(め)めきたれども」
めく「動四他」めきめき「参照」こはす。
そこなふ。嶺山「あたる物を幸に、打ち
めく、打ち破る」
めく「名」(植)めき(小葉)に同じ。
めきき 目釘「名」刀劍の身の、柄(め)よ
り脱け出でぬために、柄に設けたる孔と
刀身の目釘穴とを貫く釘。竹にて造るを
普通とし、時としては、鐵又は銅又は鯨鬚
を用ひ、通例は、一個のみなれど、長刀に
は、二個なるもあり。竹は、山城國男山の
八幡宮境内のを上品とする習なるは、八
幡を武神として尊崇するより出でしな
べしとふ。
目釘が飛ぶ「句」刀劍にて斬りあへる
間に、目釘折れて、刀身脱け去る。
目釘を打つ「句」目釘を挿して、刀身
を柄(め)より脱け出でぬやうに、目釘
を釘を蒸(め)す「句」接戦中に、目釘
の飛ぶことなきやうにとの用意に出
づ」目釘を、唾などにてぬらして、抜刀
の用意をなす。
めくぎあな 目釘穴「名」目釘を挿して、
柄(め)より脱離せしめぬために、刀劍の身
に設けたる穴。目釘一個の時は、鏢の上
一寸ほどの處に在り、二個の時は、その一
つは、頭(め)の下、一つは刀身の元に穿
つ。鍛(め)終へたる後、舞錐にて穿つ。め
ぬきあな 舞錐(め)丁と打ちければ、
……、目釘公より、ほつきと折れ」
めくぎだけ 目釘竹「名」目釘として用
ひたる竹。一代男宿に立歸り、鎖帷子(め)か
けて、着て、同じく鉢巻、目釘竹に心を附
けて、最前の方(め)に走り著き」。「同じ」。
めくぎ 薄荷「名」(植)はくか(薄荷)「
めくきり」がね 目腐金「名」見れば、目
の腐るのみにて、何の効も無しとの義、僅
かの金を屬りていふ語。はしたがね。め
くきりがね。めくきりせに。長町女腰切や
い、半七……、千兩道具の娘を、二十兩の
目くきり金で、女房に持たうや、べかこ」
めくきりせに 目腐錢「名」前條に同
じ。めくきりせに。御所禮「財布取上げ、
これはさて、足(め)にもならぬ目くきり
錢、無駄骨折ったとつぶやく向ふ」
めくきり 目腐「名」眼病にて、分泌物
のために、目のただれ汚れてあること、
又その人。目人を屬る時にいふ語。浮世
風呂「いらざるお世話だ。構やあがん。な
目くきりめえ」
めくきりいち 目腐市「名」しやうがいち
(生薑市)に同じ。めかちしやうがい(目くち
生薑)参照。東都歲時記「この生薑を商ふ
者、片目しひたる者を選んて商はするな
ら。俗に、目くきり市ともいふ」
めくきりがね 目腐金「名」めくきりがね
(目腐金)に同じ。柳尊無念さは目くき
れ金を借りに行き」
めくきりしやうが 目腐生薑「名」しやう
がいち(生薑市)を見よ。
めくきりせに 目腐錢「名」めくきりせに
(目腐錢)に同じ。「(生薑市)を見よ」。
めくきりまつり 目腐祭「名」しやうがいち
めくきり 憐愛し「形」目くし(め)の義に
て、めくはこころ(め)の心(め)のと同義なる
べしといふ。めくむ恵む参照「見る
に堪へず。惘然に思はる。氣の毒なり。
むごい。むごらし。」「古語」萬葉人無
くふりにし里にある人をめくぐや君が戀
に死なせむ」。「い」とは。かばやし。
めくし「古語」萬葉父母を見ればたふとし妻子
めくし「目くじら」目くじら「名」次條を見よ。

めくき

ひたる竹。一代男宿に立歸り、鎖帷子(め)か
けて、着て、同じく鉢巻、目釘竹に心を附
けて、最前の方(め)に走り著き」。「同じ」。
めくき 薄荷「名」(植)はくか(薄荷)「
めくきり」がね 目腐金「名」見れば、目
の腐るのみにて、何の効も無しとの義、僅
かの金を屬りていふ語。はしたがね。め
くきりがね。めくきりせに。長町女腰切や
い、半七……、千兩道具の娘を、二十兩の
目くきり金で、女房に持たうや、べかこ」
めくきりせに 目腐錢「名」前條に同
じ。めくきりせに。御所禮「財布取上げ、
これはさて、足(め)にもならぬ目くきり
錢、無駄骨折ったとつぶやく向ふ」
めくきり 目腐「名」眼病にて、分泌物
のために、目のただれ汚れてあること、
又その人。目人を屬る時にいふ語。浮世
風呂「いらざるお世話だ。構やあがん。な
目くきりめえ」
めくきりいち 目腐市「名」しやうがいち
(生薑市)に同じ。めかちしやうがい(目くち
生薑)参照。東都歲時記「この生薑を商ふ
者、片目しひたる者を選んて商はするな
ら。俗に、目くきり市ともいふ」
めくきりがね 目腐金「名」めくきりがね
(目腐金)に同じ。柳尊無念さは目くき
れ金を借りに行き」
めくきりしやうが 目腐生薑「名」しやう
がいち(生薑市)を見よ。
めくきりせに 目腐錢「名」めくきりせに
(目腐錢)に同じ。「(生薑市)を見よ」。
めくきりまつり 目腐祭「名」しやうがいち
めくきり 憐愛し「形」目くし(め)の義に
て、めくはこころ(め)の心(め)のと同義なる
べしといふ。めくむ恵む参照「見る
に堪へず。惘然に思はる。氣の毒なり。
むごい。むごらし。」「古語」萬葉人無
くふりにし里にある人をめくぐや君が戀
に死なせむ」。「い」とは。かばやし。
めくし「古語」萬葉父母を見ればたふとし妻子
めくし「目くじら」目くじら「名」次條を見よ。

めくす

めくじらを立てつ「句」「目角」を立つに同じ。「方言」

めくす「動四自」男女交合す。「上總國のめくす」目薬師「名」めいしや「眼醫者」に同じ。醒睡「目くすし、それまで居く日棒」を持たぬ。きのふはけふの物語「下京に、目くすし有り」

めくすり「目薬眼薬」名「眼病を癒すに目薬ほど」句「ほなすり」鼻薬「参照」極めて少量なる響。

めくすりのき「目薬木」名「植」械樹「科」に属する落葉喬木。高さ二三丈に達し、葉は三出複葉、小葉は羽狀脈を有し、微鋸齒あり、中央の小葉は長楕圓形、各小葉、何れも、上面は平滑、下面には剛毛を生じ、葉柄にも剛毛あり。花は黄色にして繖房花序をなし、葉と同時に發し、大形の雙翅果を結ぶ。我國本州・九州の山地に自生す。ちやうじやのき。てふのき。ふくとくのき。みつばばな。

めぐすりや「目薬屋」名「目薬を商ふ人」又は家。織豊「昔入殘」の目薬屋の根元「僅かなる事なりしに、この人、才覺にて」

めくせ「目癖」名「物を見る時の、一種の癖有り」句「目が利」く「同じ」字「我、この石を取りてん後に、目くせあるものをぞ見附くと思ひて」

目癖附く「句」前條に同じ。空鶴「そが内に、嵯峨の院は、いかに目くせ附いたまへ」

めくそ「目薬・目屎」名「めやに」目脂に同じ。落葉「ねぶたかりければ、目くそ附ちあひたる拂ひあけて」

目薬・鼻薬を晒す「句」己の缺點に氣附かずして、他人を嘲り笑ふ響。「諺語」

めくち「目口」名「目と口と。字通、これを聞くに淺ましく、目口はだかりて覺ゆ」めくち「かわき」目口乾「名」人情に通ぜぬこと、又その人。浮世風「人品の良い風をしてゐて、とんだ目口乾だの」

めくち「女鯨・雌鯨・鯨」名「鯨のめくす」

めくめ

めくす「男鯨」を對して「字通、鯨、女久知良」

めくぬぎ「雌襟」名「植」あへまき「阿部めくはす」目食はす「動下二他」目を相手に向けて、意味を通ず。目をくはす。源氏「つきじろひ、目くはす」

めくはせ「目食・胸」名「めくはす」こめくはせ「胸」前條の轉訛。太平記「互に屹と合眼」して、南部に組まんと相近づく

めくぼり「目配」名「目を配ること。めくぼり」目配「名」目のくぼみであること、又その人。

目凹に馬鹿無し「句」目の凹めるは、智者の相なりといふ語。「諺語」

めくま「牝熊」名「熊のめす」牝熊に對して「等しいかめしきめぐま・をぐま、子を生みつれて棲むうつきばなりけり」

めぐま「目限」名「目の限取。浮世風」それやあ金魚限といふのだが、今ちやあ、目限を入れる者は無きえ」

めぐみ「恵」名「めぐむこと。あはれみ。いつくしみ。恩恵」

恵の雨「句」草木をうるほし育つる雨。滋雨「夫木、目を経つつ民の草葉の枯れゆくに恵の雨をいかでそそがらん」

「萬民に通く行きたる神佛君主などの恩の響。師兼千首、君が代に民の伏屋もうるふなり恵の雨や四方にあまねき」

恵の露「句」草木をうるほし育つる露。「前條」に同じ。讀曲「西行櫻」有難や、上人の御值遇に引かれて、恵の露あまねく」

恵の眉を開く「句」眉を開く「參照」恩恵を與ふ。めぐみを掛く。平治「天道恵の眉を開き」

めぐみ「め組」名「徳川時代に、享保以後、本所・深川以外の江戸市中の町火消を、いふは四十八組（但し、へら、ひ、京」の四字を忌みて、「百」「千」「萬」の本を以て、これに代へたり）に分ちし中の、めに當りたりし組。

めくむ

め組の喧嘩「句」文化二年二月十七日、江戸芝神明境内にて、力十六十三人、め組の火消三百八十一人ととの間に起りし喧嘩。死者は前者二名、後者十名、負傷者は双方合せて九十九人なりきといふ。

めくむ「芽ぐむ・萌む」動四自「日含」雨の義「めくす」芽萌すに同じ。風雅「春雨にめぐむ柳の淺緑かつ見るうちも色ぞ添ひゆく」

めぐむ「恵む・恤む・郵む」動四他「めくむ」と語源を同じくす「いとほしく思ひて、護りたすく。情」を掛く。いたはる。あはれむ。こい。いとほしく思ひて、金品を與ふ。ほどこい。

めくら「盲聾」名「目暗の義」視力を失ひてあること、又その人。めしひ。盲人。聾者。文字を讀む能力の缺けてあること、又その人。あきめくら。優秀良否を見分くる力無きこと、又その人。

盲が杖を離れたやう「句」盲の杖を失ふが如しに同じ。「諺語」

盲が弓を引く「句」中「のらぬ響。諺語」

盲千人、目明千人「句」世の中は、盲千人、目明千人を見よ。「諺語」

盲に鏡を贈るやう「句」不適當なる品を贈る響。「諺語」

盲に提燈「句」有りても、用ふる所な盲に煮茶「掛く」句「赤兒」の腕を振るに同じ。「諺語」

「何ともいはずに、こんなえらい目に逢はして、とんと盲に煮茶あぶせるやうな」

盲に抜刀「句」鐵砲・盲に拔刀に道を教はる「句」書言故事に「所謂借・聽於鑒、求・道於盲、未・見其得者」也とあり「劣れる者より、誤れる指導を受ける響。諺語」

盲の鏡「句」似合はしからず、又、有りても、役に立たぬ物の響。「諺語」

盲の垣覗「句」見ても見えず、効無き響。めくらのぞき。「鑒の立聞

めくめ

めくめ「參照。犬子集花あれば誰もめくらの垣のぞき」

盲の壁覗「句」盲の垣覗に同じ。「諺語」

盲の下坂「句」危険なる響「諺語」

盲の高覗「句」盲の垣覗に同じ。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

盲の杖を失ふが如し「句」たよる所無くなる響。「諺語」

めくらま盲馬【名】めくらの馬。續要馬道がわるいに、草津まで乗って下んせいか。盲馬ぢやさかひ。向ふ見ずに行動する者の譬。鴉鷲合戦物語「今、この時代に相當り、何れも盲馬なれば、口に任する法門を、似合釜の蓋ありて譽むれば」

めくらかす廻らかす【動四他】めくらす(廻らす)に同じ。蜘蛛「屋」を布の端しひ引きめぐらしたる者ども、行きぢがひ、騒ぐめり。榮花「唐綾の小紋の壁代、縮など書きて、懸けめぐらせたまへり」

めくらかへ盲壁【名】「建」『英 Blind wall』窓を設けてあらぬ壁。
めくらくも盲蜘蛛【名】「動」あしたかぐも(足高蜘蛛)に同じ。
めくらこぜ盲御前【名】「こぜ」御前(目)に同じ。善曲「望月」頃、この宿にはやり候ふ者は、盲御前にて候ふ」

めくらこよみ盲曆【名】「めくら」(盲)にも理解せらるるよりいふ「あよみ」(繪曆)に同じ。
めくらさかじ盲探【名】「目」あても定めず探すこと。むちやくちやに探すこと。
めくらしおほす廻仰す【動下二他】廻文にて知らせたまふ。源氏「堂の飾、佛の御具などめぐらし仰せらる」

めくらしきお盲敷居【名】むめしきお(無目敷居)に同じ。
めくらしきお廻文【名】くわいぶん(廻文)に同じ。空想「めぐらしきみ作りて、さえども召集む」
めくらしきま盲縞【名】縞にも縞にも紺糸を用ひたる縞布。二代男「盲島の給羽織」和合人「今歳の冬は、目くら縞の皮並(ひら)をはいて、大縞縞の袍巻(かきま)せ」

めくらしんきやう盲心經【名】文字を解せぬ者のために、心經を、繪にて記したるもの。薩南「新記後醍醐」南部の邊鄙には、いろはをだに知らずして、盲経などいふものありとぞ。又、般若心經などいふもの、めくら経の法にて誦するといふ。その圖、左の如し。……盲心經」

めくらしやうぎ盲將棋【名】「目」先の見えぬに、將棋をさすこと、又その人。源世「鳳凰」この盲將棋め。……一番糖(さ)をねぶらせると、本氣で勝たつてゐる」

めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」
めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」

めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」
めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」

めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」
めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」

めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」
めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」

めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」
めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」

めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」
めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」

めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」
めくらす廻らす【動四他】めくらすやうにす。まはす。めぐらかす。固まします。とりまく。「遶らす、繞らす、環らす」

めくらふだう盲葡萄【名】「植」木防已(ふだ)科、多年生落葉草。莖は木質にして、蔓性をなし、高く上昇し、葉は二三寸の長き葉柄を有し、廣卵形多角形腎臟狀圓形をなす。夏日、淡綠色の小花を開き、葉腋より抽出して、複總狀花序に排列す。各地の山地に自生す。

めくらふね盲船【名】四方全部を、板又は橋又は竹束にて圍ひたる昔の軍船。舳にも舳にも、總を著て、進退に便なるやうにした。百合大田野等「めくら船に、竹束(たけむす)を附け」

めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。
めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。
めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。

めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。
めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。
めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。

めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。
めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。
めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。

めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。
めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。
めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。

めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。
めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。
めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。

めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。
めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。
めくらへび盲蛇【名】めくらの蛇。

めくらめち盲目地【名】「建」『英 Cloak』石の接合點の密接せる目地。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。

めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。

めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。

めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。

めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。

めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。

めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。

めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。
めくらめさう盲滅相【名】次條に同じ。

めぐりあ

めぐりあはせ 廻合〔名〕まはりあはせ(廻合)に同じ。

めぐりあふ 廻逢ふ〔動四自〕めぐりめぐりて出逢ふ。邂逅す。

めぐりがた 捲骨牌〔名〕はながた(花骨牌)に同じ。

めぐりこぎ 廻粉木〔名〕「めぐり(廻)参照」すりこぎ(掃粉木)を云ふ。「出羽國の方言」。

めぐりごよみ 捲曆〔名〕きやんだあにめぐりちがふ 廻違ふ〔動四自〕道をこなた・かなたと曲りて、行きちがふ。物異太甚。こなたの辻、こ・かしこを巡りちがひ逃げ。

めぐりふた 捲札〔名〕はなふた(花札)に同じ。

めぐりぼう 轉棒〔名〕からざを(穀竿)にめぐりみつ 曲水〔名〕次條の略。

めぐりみづ 曲水〔名〕「曲水(水)」の宴に同じ。 記「曲水宴、メグリミヅノトヨノアカリ」。

めぐりもの 廻物語〔名〕順番に物語をする。百ものがたり。古事談「鳥羽法皇御灸治の時、暑き慰めおはさんとして、御前に祇候の人々に廻物語仕るべし」と。

めぐる 捲る〔動四他〕まぐる(捲る)の轉る。廻轉す。〔動四自〕「回く動く。まはる。廻轉す。まはる。〔捲る・旋る〕」目かこむ。取捲く。圍繞(めぐ)す。〔遠る・繞る〕

めぐる 諸處を傳ひある。まはる。巡廻す。源氏「春宮(の)の御方方にめぐる程に、夜明けぬ」。

めぐる 後拾遺「めぐらしき光さもそふはもちながらこそ千代もめぐらめ」。

めぐる 進みて、又、元の位置に返る。千載「あかなくに又もこの世にめぐり來ば面がはりすな山の端の月」。

めぐる 輪廻(の)の境界を脱し得ずして、世に生きながらふ。めぐらふ。源氏「我斯くてうき世の中にめぐるとも誰かは知らん月の都に」。

めぐる 行遣(の)をなす。榮花「年ごとの九月には、御念佛せさせたまふ。……小き僧どものめぐるも、いとつくし」。

めぐる 廻る因果(の)の生涯。源氏「王義世守」。

めぐる 廻る因果と云ひながら、早くも報ふらき世ごと」。

めぐる 年「句」いしう(一周)に同じ。伊勢「かくいひける程に、めぐる年の神無月になんありける」。

めぐる 女胡桃桃〔名〕「植」ひめぐるみ(姫胡桃)に同じ。

めぐるみ

めぐる 捲る〔動下二自〕まぐる(捲る)の轉る。まぐる(捲る)の口語。

めぐる 目黒〔名〕「動」詰(の)の一種。五人高金駒子片手に、目黒のせんば煮を盛る時「浪花馬目黒小まぐる魚なり」。

めぐる 目黒〔名〕「地」武藏國荏原(の)郡にある村。東京市芝區白金豪(の)の西方に接し、上「目黒」(目黒下)目黒の三村に分る。一代男「目黒の茶屋を捜し品川の連飛(の)、白山(の)、三崎(の)の得知れぬ者」。

めぐる 目黒行人坂(の)の火事「句」明和九年二月二十九日、武藏國荏原(の)郡目黒の行人坂不動の大圓寺(もとは、天台宗、今は目黒不動の瀧泉寺に合併)より發して、折柄の西南の烈風に、白金(の)妙麻布(の)飯倉(の)西丸(の)下より下町を焼き拂ひ、神田・下谷(の)浅草を焼き千住(の)に及び、翌日申の刻鐘火せし火事。明暦の振袖火事と並び稱せらる江戶の大火。明和の大火。

めぐる 目黒鯛〔名〕「動」鯛の類の魚なるべし。平家安島「めぐる鯛のすき身、乾校魚(の)」。

めぐる ひよくづか 驪山比翼塚〔名〕源平藤橘外三人の合作に係る淨瑠璃。白井權八(實は平井權八)と遊女小紫との事を脚色せるもの。三段・十齣より成る。

めぐる 目黒不動〔名〕武藏國荏原(の)郡下目黒(の)にある不動堂。寺號を瀧泉寺といひ、天台宗にて、目白不動・目赤不動と合はせて、三不動と稱せられ、東京府下靈場の一なれども、由來は詳かならず、品川常行寺護摩堂の本尊を移したるものとも、慈覺大師が日本武尊(の)尊の像を刻みて安置せしに、その形像相似たるより誤り傳へしなりともいふ。寺門前には、茶店・酒樓ありて賑はし。色音論「目黒の不動明王は、害あらたにましませば、貴賤群集は限なく」。

めぐる 女冠者〔名〕「動」蛇足類に屬する蟠形動物。角質・長方にして、表面帶緑紅色、周縁に粗毛ある殻を具へ、全長三寸餘、長くして、三味線狀なる肉柄によりて、近海の泥砂中に附著・棲息す。採りて肥料とす。しやみせんがひ。

めぐる 名「缺け損じてある物。かけら。めげさせるめげ煙管〔名〕つぶれ損はれたる煙管。二代男「取集めたるめげ煙管」。

めぐる 名「缺け損じてある五器。若風魚口の缺けたる徳利をならし、めげごきを持つて」。

めぐる 名「女性」のけもの。獸類のめす(牡獸)に對して。和名牝、米介毛能、畜母也」。

めぐる 動「下」自「缺け損ず。つぶれ損はる。五人高飛鳥川(の)の茶いれ……めげるを構はず」。

めぐる 妻「子」名「妻」に同じ。源氏「父母を見ればたふとし妻子供ればめぐしうつくし」。

めぐる 法門「なりて」目「つま妻」に同じ。空鶴「天女下りたまふる世にや、わがめこ出て來(こ)ん、天の下には、わがめこにすべき人なし」。

めぐる 目「よめ(嫁)を云ふ。〔上總國の方言〕狂言武悪「めこどもにて見せて」。

めぐる 女「子」名「女の子供。女兒。めのこ。榮花「すべき人のめこ、皆宮仕に出でてはぬ」。

めぐる 目「基」名「よめ」(四目紋)に同じ。目「形」に同じ。源氏「かほゆし。愛らし。〔信濃國・越後國及び奥羽の方言〕」。

めぐる 目「擦」名「めすりなます」に同じ。

めぐる 目「言」名「男」女相見て語らふこと。一説に、目事の義かともいふ。〔古語〕萬葉君と時時出てまして遊びたまひし御食(の)むかふ、城上(の)の宮を常經(の)と定めたまひてあきさてはふ目辭も絶えぬそこをしもあやに悲しみ。同「横雲の空ゆ引きこし遠みこそ自言かるらめ絶ゆと思へや」。

めぐる

めぐる 名「女性」のけもの。獸類のめす(牡獸)に對して。和名牝、米介毛能、畜母也」。

めぐる 動「下」自「缺け損ず。つぶれ損はる。五人高飛鳥川(の)の茶いれ……めげるを構はず」。

めぐる 妻「子」名「妻」に同じ。源氏「父母を見ればたふとし妻子供ればめぐしうつくし」。

めぐる 法門「なりて」目「つま妻」に同じ。空鶴「天女下りたまふる世にや、わがめこ出て來(こ)ん、天の下には、わがめこにすべき人なし」。

めぐる 目「よめ(嫁)を云ふ。〔上總國の方言〕狂言武悪「めこどもにて見せて」。

めぐる 女「子」名「女の子供。女兒。めのこ。榮花「すべき人のめこ、皆宮仕に出でてはぬ」。

めぐる 目「基」名「よめ」(四目紋)に同じ。目「形」に同じ。源氏「かほゆし。愛らし。〔信濃國・越後國及び奥羽の方言〕」。

めぐる 目「擦」名「めすりなます」に同じ。

めぐる 目「言」名「男」女相見て語らふこと。一説に、目事の義かともいふ。〔古語〕萬葉君と時時出てまして遊びたまひし御食(の)むかふ、城上(の)の宮を常經(の)と定めたまひてあきさてはふ目辭も絶えぬそこをしもあやに悲しみ。同「横雲の空ゆ引きこし遠みこそ自言かるらめ絶ゆと思へや」。

めぐる 目「盗」名「見」のがして、咎めぬおとしたる物事。め「こほし」目「盗」見おとすこと、又見おとしたる物事。

めぐる 目「語」名「たぬき(狸)」に同じ。〔古語〕名義抄「狸、メコマタメキタタケ、イタチ」。

めぐる 目「小間」名「ふせ」(伏字)に同じ。め「さいあ」名「基」次條に同じ。

めぐる 目「基」名「めしや」に同じ。め「さき」目「先」目「前」目「のさき。目のまへ」。

めぐる 目「前」名「せん。はなき。一谷繁華記「その時に、我、三歳なれども、面影は目先に残り」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めぐる 目「先」名「のさき。當座。みにて、永久的ならぬこと。當座。目「先が利(き)く」。

めさく 黥く【動四他】『目裂くの義』刑
罰として、目の部分に入墨(イレ)を施す。

「古語」 紀「御糧(イカ)食(ク)しめす時に、
面黥(シ)ける老人(ナニ)來て、その糧を奪
ふ(シ)りき」 紀「黥(シ)る、メサキキザム」
めさぐ「動下二他」めしあぐ(召上ぐ) 〇

めさくら 雌櫻〔名〕「植」みやまざくら（深
山櫻）に同じ。

めざし 目刺【名】①『額髪、目を刺す程に短したる義』小兒の、額髪の、目の上の

髪をその様にせる程の幼き兒。古今、よろぎの磯立ならし磯菜摘むめざし溝
らすな沖にをれならし 狭衣めざしなる御
髪（ツ）をせちにかけやきやつつ 鰯な
どの小魚を數尾、竹串にて、その目の部
分を貫きて、乾したるもの。

めざし 芽差【名】芽差すこと、又その芽。めだし。めだち。萌芽。發芽。催馬戀（竹河）「花園に我をば放てや我をば放てやめざしたぐへて」

めざし目差目指〔名〕目ざすこと。
又目ざす所。めあて。見當ミタウ。定家卿
鷹三首「はしたかの目ざしの鈴を鳴さねば櫻狩すと人や見るらん」大原園客青葉集
「目ざしも知らぬ闇の夜」田タまなざし（眼差）に同じ。

めざし〜わじ 目刺鯛【名】目刺ニにし
たる鯛。鯛の目刺。横註栗毛「御酒二升、
めざし鯛二連」
めざし〜かご 目刺籠【名】漁父の、採りた
る魚を籠へて入る籠。平家女養

「竹の枿(マ)に目ざしかご、かたげた振も
小しほらしげな」

めくさす 芽差す【動四自】芽萌え出す。め
ぐむ。めだつ。めづくる。
めくさす 目差す・目指す【動四他】目を

めざどじ 目敏し【形】**一**見附くるこ

と、すばやし。めばしこし。目ざむる
こと早し。いざとし。ねざとし。
めざはり目障〔名〕見る時の妨となる
こと又その物。
めざまし目覚〔名〕目を覚すを見

よ」■眠たき目をさますこと、又その手
段となる物事。浮世風呂「あまり怠惰致し
ますから、晝すぎの目ざましに買つて食べ

ます」**E**心を引き立たすこと、又その手段となる物事。**盛衰記**「生殺(ロシゴ)にし

て這ひありかせよ、それこそ軍の目ざましなれ」**目めざまし**げい**目覚時計**の目ざまし。四小兒の目ざめたる時に興ふる莫子。おめざ。

めざまし目覺し**形二**物事、立派又は意外にて、眠たき目もさむる程なり。驚きあきる程なり。源氏御方目、目ざしきものこそとしめ、そねみたまふ。一同

「目ざましくつらければ、さばれと思へど、さも、え思し果つまじくて」

ことづけ顔なるを、宮には、いみじう目ざ
ましがり嘆きたまふ」

めざましぐさ 目覺草目覺種(名) 眼
たき目をさます材料となる 物事。 新讀古
今「生ひしげるねむりの森の下にこそ目
ざましがりは直うべかりけれ」 藥材言

く年の目ざましぐさや茶筌賣」**二**心を
引き立たする材料となる物。萬葉曉（ハル）
の目ざましぐさとこれをだに見つづ
まして吾（ハ）としめばせ」

めざましにくさ 目覺草〔名〕植 葉茶を煎じて飲む時は、精神の引き立つによりていふ『ちや(茶)の異稱。』(まつ(松))

の異稱。 藏玉集「目覺草。 山里の曉と
の松風や目さまし草の種となるらん」 目
『風に吹かるる音の、目をさます程なりと

めざましとけい 目覺時計【名】預定の時刻に起き出でんとする時、あらかじめ

螺旋（つ）を掛けおけば、その時刻に激しく鈴（ツ）を打ち鳴らすやうに仕掛けたる置時計。めざまし。

目をさます。目心を迷去る。氣が附く。**二**
本心に歸る。目がさむ。目が見ゆ。**三**
物事の立派又は意外なるため、心引き立
つ。目さましく感ず。

めざめ 目覺【名】眠より覺むること。ね

めさめ 目冷【名】みさめ見冷に同じ。
 一代官「いかに書き續けし玉つきも、偽が
 ちなるは、おのづから目さめおのして」
 めさる がね 目皿鐵【名】排水口の上に
 設けたる、孔ある鐵蓋。
 「よ。」
 めさる 召さる【句】めす（召す）
 目を見
 めさる 目簀【名】めがご（目簀）に同じ。

めしる 牝猿〔名〕めすの猿。空想いかにめしき牝猿、子ども多く引き連れて來てにめし飯〔名〕『めす(召)』の假體言。即ち召しあがる物の義。一説に、御食(シ)の

約轉なるべし」と穀物を炊きたるものいひ。まゝ。「粟の飯」稗飯(ヒシ)「麥飯」米を炊きたるものいひ。ごはん。毎日の食事。け。ごはん。飯の上の蠅「句」集まり來てうるさき物事の譬。後撰夷曲集「拂へども打てど

も去らず飯の上の蠅とやいはん煩惱
の犬」

飯の食上(アゲ) 【句】職を離れなどし
て、生活の道を失ふこと。扶持ばなれ。
飯の湯【句】食事の後に飲む湯。醒睡

笑「飯後の湯出てたるに、……、ある時、知吾を呼び並べ、飯の湯を、以前のやう

飯を炊く【句】米を、飯に作る。
臭い飯を食ふ【句】罪によりて、監獄

を欺くめしの飢ふはと我にいひてこそ
貸し申さめ。不覺なり」

召の鼓（つづみ）「句」官人を召す合圖に打ち鳴らす鼓。公事根源「開門などありて、召のつづみを打たしむれば、群臣、列して、門に入る」

めしあがりもの 召上物〔名〕召しあがる物。貴人の飲食物。めしもの。

俗、高貴之所食、是謂ニ召上（む）之（ふ）（食ふ）の敬語。めす。
（む）之（ふ）（食ふ）の敬語。めす。
 雍州府志「倭

めじあくゝ召上ぐ【動下二他】●めしいた
す【召出す】の敬語。めさぐ。伊勢東宮の
女御の御方の花の賀に召上ぐられたら、わ
るに【伊陽軍監】我等に召上ぐられは、わ
が氣を取る者ばかり召擧げてゝ
ゑ【取上ぐ】●の敬語。めしはなつ。めす。
【家祿を召上ぐ】

めしあはす 召合はす〔動下二他〕召し出して、相對せしむ。徒然、貢けたらん人は、供御(を)を饗(ち)けらるべしと定めて、御前にて召しあはせられたりけるに」

めじあはせ 召合（名） 二 召しあはする
こと。目古（古、相撲）の節（二）の時、七月二十八日、紫宸殿にて、相撲の勝負を決せしこと。目二枚立にせる扉又は障子ななどの出入口。太平記召合の内へ走り入つて、屏風障子を踏破り」五人互、毎夜の事

を油斷なく、中戸をさし、火の用心、めしあはせの車の音、雷よりはおそろし」

めじゝだす 召出す〔勤四他〕めびいだす〔呼出す〕の敬語。㊦呼び出して、官職位などを受けたたまふ。めしあぐ。めさぐ。

めす。清輔集「臨時祭に、四位陪從(ユヱウ)といふ事に召出されて、賀茂に参りて」

同じ。源氏、右近を召出でて、隨身を召させたまひて、「大鏡、貫之召出でて、歌つか

めいじ

うまつらしたたまへり」**めい**命じて、出さしむ。小島の口ずさみ岩根より出づる水たぐひなし。飄（五）といふ物召出で、先洗ひなどして過ぐ」

めい召入る（動下二他）よびいる（呼入る）の敬語。源氏侍従ども、けちかう召入るれば」

めい召入る（名）舞樂奉仕のため召し出された人。望遠この庭の神樂、すこしよろしうせばやめしうなど選びて」**めい**召す（召す）を見よめかけ。そばめ。おもひもの。侍妾。源氏御めしうだちて仕うまつりける松の君」**めい**「年頃、やめめにしておはしませば、御めしうどの典侍のおぼえ、年月に添へて、ただ権（三）の北の方にて」**めい**和歌所の寄人めしひの異稱。四召捕られて、牢獄に繋がれてある人。とらはれびと。囚人。源氏色葉集囚人、メシヨル」

めい召入る（名）囚人を押送するに用ふる駕籠。あみのりもの。**めい**召入る（名）召入立つ（動四自）召人（めい）のやうに見ゆ。源氏御めしうだちてつかまつり馴れたる、木工（めい）の君、中將のおもとなどいふ人」

めい召入る（名）囚人奉行（名）囚人をあづかる役人。源氏（めい）の所に、囚人奉行をば、本間とやら申し候ふ」**めい**召入る（名）のりうま（乗馬）の敬語。召料たる馬。川中島合戦、召馬引馬、雪に嘶えて引立たり」

めい召入る（名）召馬預（名）徳川幕府の職制の一。馬預と共に、若年寄の支配に属し、將軍の乗馬の飼養・調習等を掌りしもの。諏訪部村松兩氏の世襲にして、西丸下の廐内に住したり。一名、御馬別當

めい召入る（名）召し捕りて留めおく。平家成親卿を召しおかれぬる上は、たとひ、君、いかなる不思議を思召し立たせたまふとも、何の思か候ふべき」正統記、権大納言公宗の卿召しおかれしも、このまぎれに誅せらる」

めい

めいおほす 召仰す（動下二他）召し出して仰せつ。源氏「おほし餘りては、若やかなる殿上人の申しあぐがらすならんとて、いみじう召しおほせなどせさせたまふ」

めいおほせ 召仰（名）召し仰すること。天皇の、大臣などを任命せられんとて、召し仰すること。著書中、院右府の事をば、鳥羽院、頻に輕じ申させたまひけれども、……その夜、召しおほせありけり」**めい**皇后又は中宮の、行啓あるに先だち、所司、供奉（めい）の官人の名を録奏し、外記（めい）より、その官人に命を傳ふること。中右記「今、天皇宮可有二行啓仰事」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい

百廿日我近習外様（めい）のめしぐの人」**めい**召入る（名）召し出して仰せつ。源氏「おほし餘りては、若やかなる殿上人の申しあぐがらすならんとて、いみじう召しおほせなどせさせたまふ」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい

に同じ。芭蕉「夏山や紙すく里は飯時分」**めい**召入る（名）召し出して仰せつ。源氏「おほし餘りては、若やかなる殿上人の申しあぐがらすならんとて、いみじう召しおほせなどせさせたまふ」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

めい召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」**めい**召入る（名）めすの鹿。めか。（牡鹿）に對して」

多孔質にして不透明、濕氣を吸ふ力強き

めしん

ため、煙草のパイプなどに製す。海泡石(シボ)。

めしらん 雌紫蘭(メシラン)。「種」しさん(紫苑)。

めしり 目尻(メシリ)。皆(メシ)。「名」左右の目の、顔面の外側に當る方の端。外方の目かどまじり。またなじり(目頭)に對して。

めしる 目汁(メシル)。「名」なみだ(涙)に同じ。

めしる 目印(メシル)。「名」見出し、又は見覺ゆるに便ならしむるために設けたるしるし。めあて。めぼし。目標(メシル)。「動」しる。

めしる 商標に同じ。「徳川時代の語」。

めしる 召料(メシル)。「名」めす(召す)。圖を見よ。貴人の用ふる料。高貴の人の、著し、食し、乗りなどする料。

めしる 目代・眼代(メシル)。「名」もくたい(目代)に同じ。後見となりて監督すること、又その人。重贔(メシル)。お雪様、母様はござらず、目代になるこの乳母は。

めしる 目白(メシル)。「名」動「目」の周圍に、白輪あるよりいふ。燕雀類に屬する鳥。全形、山雀(メシル)よりやや小さくして、容姿愛すべく、羽色、黄緑にして、喉は黄色、腹部は灰白色、嘴は青黑色、脚は茶色に淡黒を帯び、目の周圍に白輪あり。三月頃より六月頃に互りて囀り、鵲鳥として愛玩せらる。普通種の外、大白、琉球目白、朝鮮目白などあり。「眼白・繡眼」。

めしる 目白(メシル)。「名」武藏國北豊島(メシル)。郡高田町の字。鐵道山ノ手線の停車場あり。

めしる 目白(メシル)。「名」人「東京市目白に、その邸宅ありしよりいふ」。

めしる 目白(メシル)。「名」山縣有朋の晩年の異稱。

めしる 目白(メシル)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしる 目白(メシル)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしる 目白(メシル)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしる 目白(メシル)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしる 目白(メシル)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしる 目白(メシル)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん

めしん 科に屬する落葉喬木。櫻に近似し、萼は長き管狀をなし、裂片に鋸齒あり。花は圓形にして白く、先に切込あり。ちやうじさく。こめさくら。

めしん 目白鮫(メシン)。「動」軟骨類に屬する魚。體長二丈餘に達し、形、平頭(メシン)に似て、色やや濃く、吻短くして鋭し。我國近海に普通にして、性貪食、鰻など、上層游泳の魚を餌とし、四五月の頃胎生す。わにさめ。めしん。

めしん 芽白(メシン)。「名」杉の一品種。芽の先、白色を呈するもの。

めしん 目白(メシン)。「名」東京市小石川區關口(メシン)より北豊島(メシン)の東南部にかけての丘陵。南は、音羽(メシン)の低地を隔てて、小日向(メシン)と對し、又、牛込區早稲田(メシン)の低地に接續す。市内の部に、日本女子大學あり。

めしん 目白不動(メシン)。「名」東京市小石川區音羽(メシン)の關口(メシン)の上なる高崖にある不動堂。寺は新長谷寺(メシン)と稱し、眞言宗新義派に屬す。目黒不動目赤不動と共に三不動と稱せる。

めしん 飯椀(メシン)。「名」飯を盛りて食ふに用ふる椀。第五大無量饑饉は、めし椀に入れて、しる椀をふたにし候。「對して」。

めしん 雌牝(メシン)。「名」牝に同じ。牡(メシン)に對す。(蘭語)。「名」西洋形の小刀。ないふ。(主として、醫師の切開・解剖用とす)。

めしん 目白(メシン)。「名」動「目」の周圍に、白輪あるよりいふ。燕雀類に屬する鳥。全形、山雀(メシン)よりやや小さくして、容姿愛すべく、羽色、黄緑にして、喉は黄色、腹部は灰白色、嘴は青黑色、脚は茶色に淡黒を帯び、目の周圍に白輪あり。三月頃より六月頃に互りて囀り、鵲鳥として愛玩せらる。普通種の外、大白、琉球目白、朝鮮目白などあり。「眼白・繡眼」。

めしん 目白(メシン)。「名」武藏國北豊島(メシン)。郡高田町の字。鐵道山ノ手線の停車場あり。

めしん 目白(メシン)。「名」人「東京市目白に、その邸宅ありしよりいふ」。

めしん 目白(メシン)。「名」山縣有朋の晩年の異稱。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん

めしん ありきけるを開きて。「めしん」。

めしん 目白(メシン)。「名」武藏國北豊島(メシン)。郡高田町の字。鐵道山ノ手線の停車場あり。

めしん 目白(メシン)。「名」人「東京市目白に、その邸宅ありしよりいふ」。

めしん 目白(メシン)。「名」山縣有朋の晩年の異稱。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん 目白(メシン)。「名」目白は、樹枝の上にある時、同類と推しあふといふに本づく。小兒、大勢固まりて推しあひ、推されて、中より、列外に出てたる者は、又、端に加はりて、衆と共に推す戲。

めしん

めしん 見立てし江戸のおやぢも目水晶と、大阪にても一門の喜。傾城鐵脚(メシン)。孫右衛門は日本水晶、よう勘當したてかしたと。

めしん 目塞(メシン)。「名」次條の略。和漢三才圖會「桑笠(メシン)。今多用。於時多氣郡一者、莞草全用、編之細密、因稱目塞(メシン)」。

めしん 目塞(メシン)。「名」顔面を蔽ふほどに深く、眼に當る部分に、少しの隙を作りたる編笠。

めしん 目塞(メシン)。「名」人目を忍ぶに便なる。

めしん 目塞(メシン)。「名」寛永の頃より行はれ、天和の頃には廢れたるが如しといふ。めしんがき。めしんがき。一代男「目せき編笠、足袋(メシン)に紅のくけ紐」。

めしん 目塞垣(メシン)。「名」若竹を、穂の附きたまま、隙間なく並べて作りたる垣。さきほがき。たけほがき。はぶさがき。

めしん 目塞(メシン)。「名」めしんがき。目塞(メシン)の略。正章句「二階の月に狂ひやむ袖(メシン)といふ句にやぶれより露もる著笠目せき笠」。

めしん 目専太織(メシン)。「名」琥珀織に似て、地質の極めてよき、一種の太織。

めしん 目専太織(メシン)。「名」一種の太織。

めしん 目専太織(メシン)。「名」一種の太織。

めしん 目専太織(メシン)。「名」一種の太織。

めしん 目専太織(メシン)。「名」一種の太織。

めしん 目専太織(メシン)。「名」一種の太織。

めしん 目専太織(メシン)。「名」一種の太織。

めしん 目専太織(メシン)。「名」一種の太織。

めしん 目専太織(メシン)。「名」一種の太織。

めしん 目専太織(メシン)。「名」一種の太織。

めしん 目専太織(メシン)。「名」一種の太織。

めしん 目専太織(メシン)。「名」一種の太織。



メタ

て平民的にして、社會の改良、慈善事業に力を用ふ。英本國の外、北米合衆國と加奈太とに勢力あり。分派多くして、正統派は、特にエズリ派メソヂスト教會(English Methodist Church)といふ。我國に始めて傳道せるは、北米合衆國のメソヂスト監督教會(Methodist Episcopal Church)にして、その後南メソヂスト監督教會及び加奈太メソヂスト教會を組織せり。青山學院關西學院、鎮西學院は、この派の建設に係る。

めそ(英Method) [名] 方法。方式。様式。

めぞめ 目薬 [名] めゆひ(目結) [名] に同じ。源氏「花机のおほひなど、をしき目ぞめも、なつかしう清らなるにほひ」

めそめそ [名] べそそに同じ。俗曲主役の春馬「二人、めそめそ泣いてゐるが」

めた 滅多 [名] めった(滅多)に同じ。

めだい どり 眼代千鳥 [名] (動) 涉禽類に屬する鳥。大さも、羽色も、普通の斑鳩千鳥(カササギ)と酷似すれども、嘴のやや太くして短く、尾羽の末端に黒色帯なき等によりて區別するを得。『さ』の雌。

めだいびたき 眼大鷗 [名] (動) 黄鵠(ハシロ)の雌。

めたう 女唐 [名] 『女の毛唐(カモ)』の義。西洋婦人を嘲りていふ語。(俚語)

めたう 馬道 [名] 『演繁露』に「止於馬道」とありて、註に「馬道許三人上馬處也」と見ゆ。平安朝の中頃以後は行はれ、殿中の長廊下。もと殿中奥深く、馬を引き入る時の通路に充てしものとす。めうだう。めんだう。和名「馬道、米多宇、向の堂之道也」源氏「めたうの月さしこめ」

めたらか 女踏歌 [名] せんなんたらか(女踏歌)に同じ。(男踏歌)に對して。四季物語「めたらか、をだうかのまねび」

めたか 雌鷹 [名] めすの鷹。(雄鷹)に對して。

めたか 目高眼高 [名] 目の著けどころ、高くすべであること、又その人。聖德太子繪記「神道に事寄せ、代を奪ふ逆心とは、目高がとくに見附けたり」

めたか

「動」硬骨類に屬する小魚。體長約一寸に過ぎず、口は横裂にして、兩眼は殆ど同一平面にあり。背部は暗黄又は黃色、腹部は白色。河川、池沼等の淡水に群棲し、多くは、水面を浮遊す。うきた。「丁斑魚、麥魚」

目高も魚(め)の内(め)一箇とて數ふるに足らぬ物も、その種類中の一なるには相違ない。「諺語」類聚婦馬ええ、客の振(め)して、目高も魚の内だと思つて」

めたか がれび 目高鰈 [名] (動) めいたがれび(目板鰈)に同じ。

めたか ざしあみ 目高刺網 [名] 羽後國由利(郡平澤)町の特産なる目高鰈はこの網にて漁獲するによりていふ。羽後國にて漁獲するに用ふ。

めたか じ 目高し [形] 「目」が高しに同じ。八笑人「盜賊との御目違ひ、御尤も」

めたか び 目違 [名] めちがび(目違)に同じ。

めたか ちから 雌たから草 [名] (植) 菊科に屬する多年生の草。高さ三四尺に達し、葉は鈍頂の心臟形、細鋸齒あり。下部の葉は、葉柄、特に長く、花は、頭狀花序に排列せるもの、更に集まりて、總狀をなし、頭狀花の中、周圍なる二三は舌狀花冠を有し、殘餘の六七箇は筒狀花冠にして共に黃色を呈す。我國山地に自生し、全形、雄たから草に似たれども、瘦せ且つ軟かなり。いふきたから草。

めたか がれび 目板鰈 [名] (動) めいたがれび(目板鰈)の略。

めたか 女澤女龍 [名] 接近する二條の瀑の中に、水勢ゆるく、又は低く小き瀑。(男澤)に對して。

めたか 女竹山竹 [名] (植) 禾本(め)科に屬する植物。竹類の一。高さ二三丈に達し、節は甚だ平らかして、節間、長きは三尺餘に及び、初生の新幹には、白粉著生し、篠(め)は、年を経て脱落せず、その上部の縁邊は細裂す。諸國山野に自生し、幹は、垣、竿、籠、煙管などの材料となる。あきたけ。かはたけ。なゆたけ。なよたけ。

めた

にがたけ。みかはたけ。をなごだけ。をんなだけ。

めた 芽出 [名] めめし(芽差)に同じ。「差」芽だしから人刺す草はなかりけり」

めた 形 [形] めたしに同じ。「古語」佛足石歌「藥師(め)は常のもあれど客人(め)の今の藥師(め)かりけりめだしかりけり」

めた じ 芽出肥 [名] 植物の發芽を促すために用ふる肥料。「に同じ」

めた たく 瞬く [動四自] またたく(瞬く)に同じ。

めた 目立 [名] 目立ち [形] 目立ちてあり。いちじるし。發を驚そのけしき、世の常にあらず、目だたしき程に見えければ」

めた 目立 [名] 目立つこと。五人女「頭(め)つきは、所ならはしにして、後(め)さがりに、髪先短く、長臨差もすぐれて目立なれども」

めた 芽立 [名] めめし(芽差)に同じ。

めた 目立つ [動四自] 特別に目に著くる。目に立つ。世親などのかなしうする子は、目だち見立てられて、いたはしうこそ覺ゆれ」

めた 目立つ [動下二他] 特別に目を著く。目をそそぐ。目を立つ。源氏「御ふみは、あまり人もぞ目だつるなどおぼして」山宮庭の岩に目だつる人も無からましとかあるさまに立しておかねば」

めた 芽立つ [動四自] めめす(芽差)に同じ。太馬穩は枯れて接木の臺の芽立ちけり」

めた 目立 [名] 鋸の齒(め)の、確(め)の目のつぶれて鈍くなりたるを、鋭くすること、又その職業の人。めきたる。『じ』

めた 女鯛 [名] (動) いしなき(石投)に同じ。

めた 目玉 [名] (名) がんきう(眼球)に同じ。『め』めくつること。叱責すること。(多く接頭語)を添へて用ひ、受身の者又は第三者よりいふ。目の玉。「お目玉を頂戴す」目主人・親分・親方など、目上の人。

目玉が飛出る [句] 「目」が飛出る「に」

めた

目玉が抜出る [句] 「目」が飛出る「に」に同じ。諸藩太平記假にも平座(め)居眠などするを見ては、目玉の抜出るほど叱責するを得るなり」

目玉を頂戴す [句] 次條を丁寧にいふ時の語。「を食(め)」

目玉を貰ふ [名] 叱責せらる。目の玉

めた (獨Methan) [名] (化) パラヒン族炭化水素中、組織の最も簡單なるもの。無色、無味、又殆ど無臭なる輕き氣體。水には殆ど吸収せられず、平温に於ては、よく大概の元素及び藥劑の作用に抗し、有機化合物中最も安定性なるものなれども、空氣中にて點火する時は、殆ど光なき焰を擧げて燃焼し、無水炭酸及び水となる。その酸素若しくは空氣を含めるものに點火する時は、忽ち爆發す。化學的方法を以て合成し得れども、天然には、有機物の自然及び人為の分解によりて、屢ば生成し、石灰瓦斯の主成分をなし、又、古き池沼の泥床を棒にて衝く時、泡をなして發生する氣體の中に、多量に存在す。「に沼氣(め)」と呼ぶ、これがためにして、炭坑にても、往往、炭層の間より發生して、爆發の原因となること妙からず。もと永久瓦斯と思考せられたれど、今日にては、液體にも化せしむるを得べく、なほ冷却すれば、氷結するに至る。

めた がほ 目垂顔 [名] 面目なく思へる顔つき。面伏(め)なる様子。めだれがほ。平室山門の大衆は目だり顔しけりなど、京わらんべの申さん事、後目の難にや候はんすらん」

めた りんさん メタ磷酸 (英 Metaphosphoric acid) [名] (化) 無水磷酸を冷水に溶かすか、正磷酸又は焦性磷酸を徐徐に熱する時に生ずる、無色透明なる塊。潮解性に於て、水に溶け、正磷酸に變じ易く、蛋白質を沈澱し、鹽化バリウム溶液によりて沈澱を生ずる點に於て、他の磷酸と區別す。

めたる [名] 英 Metal (金屬) と混じて誤りたるものか。次條の轉訛。

めたる (英 Metal) [名] 人の技能功績な

めつきん 減金〔名〕金(金)を磨屑(さく)に

めつきん 減銀〔名〕銀(銀)を磨屑(さく)に
るもの。水銀に和するは、即ち金のア
ルガムを作るものにして、後世、乾式の鍍
金法と呼ぶ。又、同様に、銀の磨屑にせる
を減銀(めつきん)といふ。延喜式「減金四兩」
めつきん 減銀〔名〕前條を見よ。延喜式
「減銀廿五兩」

めつきめ 減銀〔名〕めつきめと同じ。染模樣
妹背門松藏の引戸、めつきめつきとこち
放す」

めつきやく 減却〔名〕「きやく(却)は接尾
語」ほるぶること。ほるぼすこと。破滅。
女殺通緝「我が身上のめつきやくあり」

めつきやく 減極物〔名〕「理」『英
Depositor』電池の本電流と逆方向に電
流の起る状態を成極といひ、それを防ぐ
に用ふべきものをいふ。

めつきり 滅切〔名〕「滅切は假借の字」目
立ちて著しきさま。めつきり。長町女服切
「彼岸過ぎたりや、めつきりと目が短い」

めつきり 目附く〔動下二他〕みつき(見附
く)に同じ。續髮髻「おらあこの姉ばう
を目つけた上の謀叛」

めつきる 芽作る〔動四自〕めさす(芽
差す)に同じ。胎内にやどる。日本報
「女房の腹に、總領が芽づくた」

めつき 目附目付〔名〕足利時代以後
の武家の職制の一。君主のために、平生
は、非違を監察し、戦時にも、軍陣に臨み、
將士の舉動を推知して、事狀を具して、密
告することを持ちしもの。足利幕府及び
織田豊臣兩氏にては、横目附又は略して
横目といひ、徳川幕府にては、大目附目
附の別を立つ。又、織田・豊臣・徳川の各時
代を通じて、諸大名も、これを置きたり、

徳川幕府の職制の一。若年寄に屬して、
奥向及び諸大名を除きたる、政務一切の
監察に任じ、最も権力ありし重要な職。城
内非常の際に於ける指揮、宿直並びに殿
中の禮法より、評定に参加し、又、訟獄土
木・兵・事・國防及び府内に於ける學務等
に涉り、又、京都・大阪・長崎・駿府等に出張
査閲せり。元和三年、始めて十人を置き、

寛永十六年、月番二人を定めて、當月の非
違監察に任せしめ、慶安三年、更に西丸に
も、六人を置き、後、本丸のは、増加して九
十人に至り、更に九十四五人に及びしこ
ともあり。徒(と)目附・小人(こ)に目附火
事場目附・國目附・徒附(と)御安關番中
口(く)番火之番組・中間頭(ちゅうかんづか)・豪所
番等を支配せり。目様子を探索の役。ま
はしもの。密偵。若山日録「居二獄吏之下、
克知盜賊之舉止者、號二目附に附て、
これを見よ」目目に見。めあて。醒睡
笑「屋根の上に、鶯の二つありしを目附に
したりしが」

めつき 芽漬〔名〕このめつき(木芽漬)に同
じ。續詞花集いとほしや鞍馬の芽漬い
かなればふつと見えすといふにかある
らん」

めつきいし 目附石・目付石〔名〕基石を
用ひて行ふ、一種の遊戲。運歩色葉集「目附
石、メツケイシ」

めつき 目著字・目附字・目付字〔名〕
めつき(目附繪)を見よ。毛吹草「こなたか
なた行くや目附字(目)天雁(てんげん)」加羅女島原
「太夫目付字といふ煙草入の仕出(しで)、奉
書一枚に、大阪の太夫三十六人を、歌仙に
作り、これを、一句、人に目を附けさせ、此
方より、その目付字をあらはす口傳なり」

めつきばしら 目付柱〔名〕みつきばしら
(見附柱)に同じ。「乗りてある船」

めつきね 目附船〔名〕目附の役人の
めつきべや 目附部屋〔名〕目附の役人
の詰めをる所。「物」の轉訛。

めつきもの 目附物〔名〕みつきもの(見附
物)の目附物〔名〕前條の音便。
めつきもの 目著紋・目附紋・目付紋〔名〕
めつき(目附繪)を見よ。二代男「目附紋合
はつてゐる」

めつきもん 目附繪・目付繪・目付紋〔名〕
前條に同じ。諸覽大鑑「目付紋繪」

めつきる 目ける〔動下一他〕めつきる
めつきる 目ける〔動下一他〕めつきる

附く)の訛。
めつきる 目著繪・目附繪・目付繪〔名〕
相手に、多くの繪を見せ、その中の一に目
を著けさせおきて、何れに目を著けたる
かを言ひあつる戲。同様に、文字を繪に
代へてするを目著字(めつき)といひ、紋所に
てするを目著紋(めつき)といふ。

めつき 女子〔名〕「つは價格の助詞」め
の(女子)に同じ。「古語」萬葉母に奉
(り)つやめつこの刀自(こ)父に奉りつや
みめつこの刀自

めつき 滅後〔名〕「佛」入滅の後。日
釋迦入滅の後。諸曲現在七面「滅後の弘經
(くわい)も、正(ただ)像末に次第して」

めつき 滅期〔名〕死ぬる時期。臨終。末
期(まき)。

めつき 愛子〔名〕めづる子。かはゆき
子。いとど。まなご。ほんそご。あひ
し。「古語」萬葉父君に我はまな子ぞ母
とじに我はめつこぞ」

めつき 滅罪〔名〕「佛」次條を見よ。ほ
めつき(法華滅罪寺)參照。
滅罪・生善(やうぜん)〔句〕「佛」佛力を請
ひて、現世の罪障を斷滅し、後世(ご)の
善根を生ぜしむること。大鏡「やんご
となき、智者あるは持經者・眞言師ども
……に、夏冬の法服を賜ひ、供料(くりょう)
をあてたまひて、わが滅罪生善の御祈
又、姫君の御息災を祈らしたまふ」

めつき 滅相〔名〕「佛」大藏法數に
「業盡命終、身亦壞滅、是爲滅相」とあ
り「塵境既亡、心念亦滅、是爲滅相」とあ
るに基に、萬の滅亡する相。日
と。めつばふ。「京都・大阪の語」伊賀越道
中雙六「これこれ、荷は、己(こ)が持つてや
る。ああ、旦那様、滅相な」

滅相も無い〔句〕滅相なるさまなり。
あきまるほどに基し。

めつきかい 滅相界〔名〕めつきかい(滅
法)に對してめつきかい(滅法界)といふ語
あるに混じり、めつき(滅相)に(界)を
添へていへる語。次條參照「めつきかい(滅

相)に同じ。
めつきかい 滅相買〔名〕いかに高き金
を拂ひて買ふこと。

めつき 滅紫〔名〕染色にて、櫻(さくら)めかか
りたるが如くに見ゆる紫。
めつき 滅色〔名〕「佛」滅亡色。生者の
滅ぶる時の色。諸曲歌占「染色(さくしき)とは、
風病の色身(しん)しも生(な)る。老病・死の次
第を取れば、西紅(さいこう)と見えたるは、命期
(めいき)六交(りくかう)の滅色なれば」

めつき 滅失〔名〕ほろびうすること。
めつき 滅失回復登記〔名〕「法」くわいふくろき(回復登記)
を見よ。

めつき 滅盡〔名〕滅び盡くすること、又
滅ばし盡すこと。消滅して、形迹を留め
ざること、又消滅して、形迹を留めぬやう
にすること。正語三「三千大千世界同時
に滅盡する、これを壞劫(わうけつ)」といふ」

めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶる。消滅す。日消ゆ。
めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。
めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。

めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。
めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。

めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。
めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。

めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。
めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。

めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。
めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。

めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。
めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。

めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。
めつき 滅す〔動佐變目〕無くなる。ほ
ろぶ。つぶす。日消す。消えしむ。

として迎ふ。「某氏の長女を娶る」
 ところのおむ 拍節器・拍子計 (英 Metro-

めな

nome 獨 Metronom) [名] [音] 楽曲の奏せらるべき速度を精密に指定するに用ふる器。振子に、移動し得る錘(のり)と目盛(のり)を施せる尺度とを添へたるものに、錘を置きたる箇處の目盛は、一分間に於ける振子の振動回数を示す。現時は西曆一八八六年、事實特許を得たるメルツエル(J. N. Metzel)氏のもの、一般に行はれ、その指定の数を樂譜上に記入するに「M. M.」=110 又は單に「」=110の如くす(M. M. は獨 Metronom の略符)。拍節器(のり)。

めなう 馬腦瑪瑙馬瑙 [名] [鑑] 石英中、結晶形をあらはさざるもの。一色は赤色灰色等にして、濃淡種種の縞目又は不規則なる模様をなし、岩石の孔隙の壁より次第に中に向ひて重なりたる皮殻をなして産す。我國にては、後志(のり)國のトシベツ川、加賀國の那谷(のり)等に産し、若狭國小濱(のり)には、その細工の工人ありて、その製造品を若狭瑪瑙といふ。和名馬瑙メノウ。盛衰記「石は、補陀洛山(のり)にしては、寶石と名づく。或は金剛石といひ、大唐には、瑪瑙と名づけたり」。

瑪瑙の帶 [句] 瑪瑙にて飾りたる石帶(のり)。名目抄「馬腦帶、丸柄之外無二巡方、非參木大將已下、四位之上、上下用之」。

めなこ 女子 [名] 『なは助動詞なりの連體形の略』女なる子供。むすめ。めこのこ。女兒。狂言粟田口「上京に姉、下京に妹を持ってござる。兩方、めな子が御座る」。

めなこ 蠶 [名] 息災、めなこ、小悴、産(のり)の儘なる蠶鬼十二疋。

めなこ 女子結 [名] みなこむすび、蟻子結の轉訛なるべしといふ。めこのむすび。廣義、佐保姫のめなこ結か絲柳(のり)。

めな

めなじ どの 目無共 [名] 『めなないぢどり(めなない千鳥)参照』めかくし(目隠)に同じ。福富草子、目なしどの、軒の雀遊ぶ(のり)。

めなじ どり 目無鳥 [名] [動] 『鳥が視力を失ひては、廣き大空に目あてを定むること能はざるよりいへるならん』非歎の餘、途方に暮れたる人の譬。奥州安達原「二世の夫(のり)にも引き別れ、泣き潰したる目なし鳥」。

めなじ わた めなし綿 [名] 綿の一種。色極めて白く、光澤あるものといふ。七一職人歌合「一村も曇ると見ゆるめなし綿おなじ色なる月のさやけし 判めなし綿は、極めて白く、きらの待るとかや」。

めなだ 赤目魚 [名] [動] 硬鱗類に屬する魚。形も大さも、鰻(のり)に似て、頭一層厚く、上唇厚く、口の形、「へ」の字形をなし、全身やや微赤色を呈し、口邊殊に紅色、眼も赤く、性質も鰻に似たり、やや沖合に棲息し、我國、西南海に多く、やや沖合の頃より、漸次淡水の混合する港灣、河口等に来り、九十月の頃産卵す。卵巢は、腸子(のり)に製して珍重す。あかめ。あかめうを。いせけひ。いそごひ。からすみ。ぼら。しくち。しくちぼら。どうない。めなづ。

めなづ [名] [動] 前條に同じ。

めなみ 女浪雌浪 [名] 男浪(のり)と男浪との間に、低く弱く二つ打ち寄する浪。(男浪に對して)。

めなみ 稀菱 [名] [植] 『めは雌にて、まなみ(葉耳)に對せしめたる名』菊科に屬する、一年生、有毒の草。莖は、方柱形にして、高さ三四尺に達し、枝對生し、葉も對生して、三角形に近き卵形をなし、薄く柔かにして、粗鋸齒を具へ、葉腋より花枝生じ、毎枝、二三の頭狀花序を著け、花序は小形にして、周囲の舌狀花も、中部の筒狀花も、黃色を呈し、總苞は匙狀をなし、外縁の五片は、大形にして、萼片狀を呈し、粘質の液を有す。我國、北海道より臺灣にかけて、山野に自生す。もちなも。

めな

めな 徒然、めななみといふ草あり、くちばみに整されたる人、かの草を採みて附けねれば、即ち瘡となり。

めな 二つの位の、何れも五の數なるもの。『商人の符牒として用ふる語』。源氏「元値が六百だ。もう餘だから、五十損をして、五百五十(のり)にしてやらう」。

めな 目馴す [動四他] 目馴るるやうに。常に見る。源氏「ありしよりけに目なす人、今はとて、行きわかれん程こそ」。

めな 目並ぶ [動四自] 『見え並ぶ義といふ』數多くして、比較せらる。『古語』萬葉西の市にたたびとり出てて眼ならばず買へりし絹のあきじりかとも(のり)この歌のは、己一人のみにて見分けたる意なりとの説もあり。古今花がたみ目並ぶ人の數多あれば忘れぬら數ならぬ身は」。

めな 目馴る [動下二目] みる(見馴る)に同じ。後撰ほの見ても目馴れにけり」と聞くからにふし返りこそしなまほしけれ」。

めな 目馴木 [名] みなれき(見馴木)に同じ。關孝集「浪かへる岸のひたひのめなれ木の目なれて妹とぬる由もなし」。

めな 目貫 [名] [め] 目は孔の義。刀劍の綬經(のり)の下にある金具。古くは、間塞(のり)ともいひて、目釘の上下覆なりしが、何れの代よりか、二者別物の物となり、高彫を施し、金銀にて裝飾しなすに至り、實用上には、何の關係もなきやう思はるれど、なほ、柄絲の締ると締らざるとは、この物の上に、大なる關係あり。中右記「目貫之穴二」太平記「面、太刀の目貫の堪へん程は切合せ」。

めな

めな 目貫師 [名] 目貫の製造を職業とする人。

めな 目貫元 [名] 目貫のある處。大藏源經「目貫元」この刀、目貫元より、ほつきと折れ」。

めな 目貫屋 [名] 目貫を造ることを職とする家又その人。義經傳「目貫屋の段」。

めな 目貫屋長三郎 [名] 淨瑠璃の名人。京都四條・東洞院(のり)に住みて彫金を業とせしが、澤角(のり)に檢校に學びて、淨瑠璃を能くし、後陽成天皇より、太夫の稱號を授けらる。

めな 目貫緒 [名] 太刀の柄頭(のり)より垂る、飾の緒。

めな 目塗 [名] 合目(のり)を塗り塞ぐこと、又それを塗るに用ふる物。日土藏の月前などを、漆喰(のり)にて塗り塞ぐこと。火事の時にする事なり。

めな 女猫牝猫 [名] めすの猫。をんなねこ。(男猫に對して) 俳諧新選木難「あこがるる女猫の様や雨の暮」。

めな

めな 女螺蛳 [名] ねぢ(螺蛳)を見めねらすのつりメネラスの定理 [名] 『英 Mathematic theory』(數)三角形を形づくれる三直線を、割線にて截する時に生ずる邊の六部分の中、隣接せざる三部分の積は、他の三部分の積に等しいといふ定理。

同じ。「一代男」手元にあらし「百錢」を抜きて、心おぼえに目の子算用」
めのもむすび 女子結「名」みなこむすび
(蟻子結の轉訛なるべしといふ。めなこむすび)

めのもやつて 女子奴婢「名」をんなのしもべ。めやつて。下女。下婢。(男子奴に對して)「古語」記「婢メノコヤツコ」

めのもした(蘭Ministerの訛)「名」二し(公使)に同じ。「德川時代の語」

めのもしたのほほあて 目下の頬當「句」ほほあて(頰當)を見よ。

めのもたま 目玉眼球「名」めだま目玉に同じ。

目玉が飛出る「句」目玉が飛出る「句」目玉が蕩(ひける)「句」長時間縫入りたる時の形容。

目玉が拔上る「句」目玉が飛出るに同じ。竹簾物語目玉の抜けあがるほど叱られて、このむめ法師こすこす行く

目玉の黒い中「句」目玉の黒い中に同じ。

目玉を食ふ「句」目玉を貰ふに同じ。

めのも乳女「名」妻の弟の略。和名抄に「乳母、日本紀師説、女之於止言、妻妹也」とありうば(乳母)に同じ。は「ちこのめ」と

めのも傳「名」前條の語の轉義「傳育する役、又その人。もりやく。保正豊後の國に居住し、尾張權守家遠をめのとして」増鶴内の御めのと吉田の前大納言定房

めのも乳母子「名」乳母の子。乳母たる女の生みたる子。源氏侍從などいひし御めの子のみこそ、年頃あくがれ出てぬものにてさぶらひつれど

めのも傳子「名」傳の子。傳たる男を父とする者。保正「一の宮典仁」親王は、故刑部卿忠盛の養子にましますば、清盛は御傳子なれば、故院、御心をおかせ

給ひて」盛衰記「あれは、木曾の御乳母のこに、中三權頭(みぎみか)が娘巴といふ女なり。……乳母子(に)なるが妾(めかけ)にして、内には童(わらわ)を使ふやうにもてなし」

めのもだつ 乳母だつ「動四自」乳母のやうにてあり。源氏過ぎにける御めのとだつ人、もしは、親の御方につけつつ傳はりたる物

めのもさう 乳母草子「名」書女子教養の書。貞丈鑑記京都將軍時代の書なり。ある家のめのと、我が育てて姫君へ參らせし書なりと申し傳ふるなり。この書、女の戒、又女房の故實を書きたるものなり、善き書なり

めのもまへ 目前「名」見てある前。まのあたり。めさき。もくせん。萬葉今の世の人もことごと目の前に見たり知りたり」極めて近き處又は時。當座。

めのもまんねんぐさ 佛甲草「名」(植)めは雌の義。萬年草(に)の一品種。葉の輪生せぬもの。あかねなぐさ。いちげさう。いつまでぐさ。たかのつめ。ねなしぐさ。(を)まんねんぐさに對して)

めのもわらは 女童「名」をんなの子供。女の子。少女。めらは。めらう。める。(男童(に)に對して)源氏いとううたしと思ふめのわらは侍り」召使の少女。若き小間使。紀「女孺、メノワラハ」

めのもわらは 女童兒「名」前條に同じ。萬葉「老人(に)も女童兒も」

めのもわらは 女童部「名」前條に同じ。榮花「宮殿ばら。家家のめのわらはは」

めのもわらべ 女童「名」前條に同じ。(男童に對して)和名女童、女乃和良倍

めのもあんどう めばう豌豆「名」(植)めばあんどう(豌豆)に同じ。

めばえ 芽生「名」芽の生えそめたること、又その草木。めざし。接木(に)挿木(に)などに依らず、種子より發生したる初、又その草木。目物事の發生したる初の時。

めばかり 目計頭巾「名」がんだう

づきん(強盜頭巾)に同じ。
めはじ 目端「名」めはじり(目走)に同じ。目端が利く「句」すばやく氣が附く。氣轉が利く。氣が利く。目先が利く。目端を利かす「句」氣の附方すばやく。氣轉を利かす。氣を利かす。目先を利かす。

めはじき 目彈「名」またたき瞬に同じ。めはせ(目食)に同じ。「一代女」裏口より雪踏(に)の音の聞えしが、娘(に)目はじきて立ち向ひ

めはじき 荳蔻・益母草「名」(植)唇形科に屬する草。莖は細く方柱形にして、高さ五六尺に達し、葉は薄くして柔軟、莖の下方のは圓くして、缺刻多きさま、烏頭(に)の似、上方に至るに従ひ、漸く狭小となり、梢葉は、對生し、大なる缺刻ありて、三小裂片に分れ、

各小裂片の縁邊には、數個の小缺刻あり、恰も艾(に)の梢葉に似、夏秋の頃、梢葉の腋部には、大さ三四分にして、淡紅紫色、又稀には、白色の唇形花簇生し、果實は、小形にして長く、四稜を具ふ。我國、原野に自生し、臺灣にも産し、果實は、荳蔻子(に)と呼び、藥用に供す。にがよもぎ。和名「荳蔻、女波之木」

めはじこし 目敏し「形」目附くること、すばやく。めかしこし。

めはじら 目柱「名」暮目(に)の目と目との間の部分。保正目九つ差したる鏡(に)の目柱には角(に)を立て

めはじり 目走「名」見る事の氣轉。見て氣の附く才智。めはし。

めはたき 瞬「名」目蓋(に)を、屢ば開閉すること。またたき。またたき。

めはたき 瞬(動四自)「目をはたく義」またたき(瞬)に同じ。

めはち 目耽「名」大人(に)は目耽、下衆(に)は口耽(に)を見よ。「もらへ」

めはち 目ばち「名」目に發する瘡。ものめはち 雌蜂「名」めすの蜂。(雄蜂(に)に對して)

めはち 動「名」きはだまぐろ(黄肌鮒)に同じ。

めはち 目八分「名」次條に同じ。

めはち 目八分「名」物を神前に供へ、又は貴人に呈しなどする時、兩手にて、これを、目よりすこし低きほどの高きに捧ぐる。俗曲(新慶安樂)「巻物」一巻取出し、渡せば、辨慶受取つて、恭しく鑑取て、目八分に打開し、勸進帳の空讀(に)は「器の全容量の十分の八ほどに物を盛り又は入ること。はちぶんめ。目八分に見る「句」(眼下(に)に見る)に同じ。



(きじはめ)

めはち 目鼻「名」目と鼻と。目又は鼻。「同じ目鼻とも見えす、くちをしくぞおされたるや」

目鼻が明く「句」次條に同じ。

目鼻が附く「句」物事の大體のきまりが附く。形勢ととのふ。俳諧新選「春雨や目鼻の附きし茄子苗」注意行き届く。氣が附く。(主に)打消の形にて用ふ「あの人は少しも目鼻が附かぬ」

目鼻を明ける「句」次條に同じ。

目鼻を附ける「句」物事の大體のきまりを附く。

めはち 雌花「名」(植)しくわ雌花(に)同じ。(雄花に對して)

めはち 目放す「動四他」注意を、その物より放す。わき見をす。(主に、打消の形にて用ふ)重井鶴二階(上る體(に)氣がかりなれば目ばなさず、折折心を附けたるが」

めはち 目鼻立「名」目鼻のさま。かほだち。容貌。梅野目鼻立が満足て、色の白いがお仕合(に)はち 目ばち「名」目ばちきさま。生寫眞、類畫徳右衛門、目早に見て、お朝、朝顔か、遅かった」

めばやし

めばやし 目早し【形】見附くること、すばやし。めざし。うたなぬ虱小さく書きつくれど、目ばやし山がつもやと、つましなから

めばり 目張【名】物の隙間を、紙などに張り塞ぐこと、又それに用ふる物。

めばりなます 目張鯉【名】めすりなます(目擦鯉)に同じ。油揚げを吞んで吐逆をぞする(いふ句に)食ひつけぬ目はり鯉に胸わるし

めばりのき 雌榛木【名】植【いづつ】(犬黄楊)に同じ。日かはらはん(河原榛木)に同じ。

めばりやなぎ 芽張柳【名】春先、芽に萌え出でんとする柳。紫の本、柳島、或人の發句に、めばり柳しまのぬれ衣ししかた

めばる 眼張鯉【名】動【硬鱗類に属する魚。體形扁長、全身褐色にして、長さ二尺に達し、頭の上は扁く、棘あり。兩眼突出し、下顎や前方に突出。近海の岩礁の間に棲息し、我國到處に産す。くらめばる。すみかさ。そい。

めひ 姪女姪【名】兄弟、姉妹の子の、その人に對する關係。(甥に對して) 和名兄弟之女姪、米比

めひかりさめ 目光鯨【名】動【あぶらさめ(油鯨)に同じ。

めひき 目引【名】織物を、その元來の稿・模様などの隠れぬやうに、更に染むること。縫製毛、目引の立竊に、肩の折、柄柄變りたる切を當てたる給を引張り

めひじ 姪御【名】めひ(姪)の敬稱。

めひじは 馬唐【名】植【禾本(イネ)科に属する草。高さ一二尺に達し、葉は狭長にして、互生し、平行脈を有す。花は、小穂狀花序に排列し、その小穂花序、多數集まりて、覆輪狀花序をなして、數本莖頂に集生す。我國、原野に自生す。あきばこり。たちひじは。ひじは。ほどぐさ。や

めひだつ

めひだつ 姪だつ【動四目】姪といふ程の血縁に當る。源氏姪だつ二人三人

めひつて 姪子【名】めひ(姪)に同じ。

めひのはま 姪濱【名】地【筑前國早良(ササ)郡にある町。福岡灣に臨み、唐津(カサ)街道に當り、東は、早良川を隔てて、福岡市の西なる西新町(ササ)の百道(ササ)松原に連なり、西には、生(ササ)松原あり、北端の妙見崎は、殘(ササ)島と相對し、風景絶佳、又、元寇の古戰場にして、往古、九州探題府の置かれし所なり。】ん木に同じ。

めひひらぎ 雌柊【名】植【りんぼく(リ)】ひも 雌紐【名】袍直衣(ササ)狩衣などの入紐(ササ)に於て、雌紐と共に結び合はする、輪にしたる紐(雌紐に對して)

めびやうし 雌拍子【名】雅樂にて、樂器の打物を、左の手にて撃ちはじむること。(雄拍子に對して)

めびる 雌胡【名】植【こひる(小葱)に同じ。】

めぶ 馬部【名】(馬部)參照 左馬寮右馬寮の下寮(ササ)もと馬を取り扱ふ者なりしが、後には、常に禁中に宿直して、近衛の吉上(ササ)と同じく、非違を彈糾したり。平家、彈正大弼仲國(ササ)俱に召したる馬部、吉上などどもおき、その屋を守護せさせ

めぶか 目深【名】めぶか(目深)に同じ。字彙、深目也。女不可

めぶくら 目植【名】めぶくら(目植)に同じ。

めぶし 女節雌節【名】鯉の腹の肉にて製したる鯉節。はらぶし。(男節(ササ)に對して) ほんぶし 本節【參照。

めぶのつかさ 馬部司【名】齊宮寮の外院の(ササ)二司の一。職員に長官、主典あり、下に馬部の四人あり。】の長官

めぶのしをさ 馬部長【名】馬部司(ササ)の副官

めぶのりやう 目分量【名】度量衡に依らず、大よそに見はからひて、分量を測ること。めづり。雙鏡圖(ササ)日記「窓の引繩、三尺残して切るが古例、目分量にもこれからと、すらりと抜いて、縛繩、すっかり

めへん

めへん 目偏【名】漢字の偏の一。「眼」

めほう 目棒【名】目薬を目にさすに用ふる棒。醒睡(ササ)目くすし、それまで届く目棒を持たぬ

めほう 面目【名】めんほう(面目)の略。

めほう 目星【名】目あて。めじるし。【目星を附く】

めほう 目星の花散る【句】「がんぐ(眼花)を見よ」目にきらきらと、ちらつきて見ゆ。東海道名所記「一面に白く覺えたるは、やうやうひだるきに、目星の花の散るならん」

めほう 目ぼし【形】多くの中にて、目立ちて見ゆ。【別にめぼしき物も無し】

めほう 目細【名】目の細きこと、又その人。ほそめ。

目細あれど、口細(ササ)無し【句】食慾無き者は無し。【諺語】世に目利(ササ)は稀なれど、口利(ササ)は多し。【諺語】

目細鼻高・櫻色【句】美人の形容。【諺】

めぼせ 眼細【名】動【燕雀類に属する小鳥。形も羽色も、鶯に似たれども、それよりも小く、且つ上面の色、や緑を帯び、白色の横眼條あり。春秋の頃、平原に棲み、夏は山林に入りて、蕃殖を營む。樹上に在りて、蟲の鳴くが如き聲を發して囀る。まつし。りんりん。

めぼさけ 目佛【名】目の内にある佛。ひとみ。瞳子。

めま 牝馬【名】めうま(牝馬)の略(牡馬めまうけ 妻備【名】妻を備へること、妻光とめとること。【古語】榮基源中納言重光を問ゆるが、おん婿になリたまひぬ。御めまうけの程、兄君にこよなうまひたりまひぬ。

めまきらひ 目紛らし【形】めまぐるし(目紛し)に同じ。浮世庄、江戸っ子の早さ、なんでも目紛らしい様だ。【同じ。

めまきらひ 目紛はし【形】前條にめまきれ 目紛【名】目のちらつきて、よく見るを得ぬこと。目のくらむこと。

めま

めま 寶馬【一の山の麓に、方三尺の石あり、青、黄、赤、白紫の五色にて、眼(ササ)を合はするに、目まぎれせり】

めま 女幕【名】外幕(ササ)の一種。第一の幅(ササ)の上端を、表へ折り返し、左右の横の端を、共に表へ折り返したるもの。陰(ササ)の幕(男幕(ササ)に對して)

めまぐる 目紛し【形】目まぎれするさまなり。形・色などさままざるため、又は多人數混雜せるために、目先定まらず。めまぎらひ。めまぎらひ。めまぎらひ。めまぎらひ。

めまじ 目増【名】骰子(ササ)の目の數の、相手のより多きを勝と定めて、賭物(ササ)を得る遊戲。東鑑目増勝負

めまじろき 目瞬【名】まじろき(瞬)に同じ。源氏、少將・右近、目まじろきをして

めまじ 目交【名】めくはせ(目食)に同じ。若風俗(亮宗(ササ))と目まぜすれば 長町女腹切「目まぜて知らすれば」

めま 目だるし 目だるし【形】見るに、まだるし。若風俗、磯なる色遊は目鏡(ササ)くて、皆、この美少年に逢ひぬ

めまつ 女松雌松【名】植【あまつ(赤松)に同じ(男松(ササ)に對して) 心中萬年草「女嫌や高野(ササ)の山に、なぜに女松が生ゆるぞや」

めまつばら 女松原雌松原【名】女松の一面に生えてゐる處。猿蓑凡亮「百舌鳥(ササ)鳴くや入日し込む女松原」【同じ。

めまどひ 目纏【名】動【めか(糠蚊)にまなこ 目眼【名】目。まなこ。めだま。奉太郎記石野目まなこのおっかな人】

めまひ 目眩、眩景【名】目舞ふ義ののくらむこと。眩暈(ササ)。

めまひもち 目眩持・眩景持【名】目まひの起りやすき體質、又その人。冥途飛脚「日頃が目まひ持なれば」

めみえ 目見【名】まみえ(目見)に同じ。狂言秀久名「あれへ出て、めみえをめされ」 奉公人などが、奉公の始に、

同じ。(雄棕に對して)

面を取る「句」面の「句」を缺き取りて
平面又は他の形にす。



の囚徒、又は三年を経たる有期流刑の囚

その以故のため通常千分の五の石灰酸を加ふ。治療血清。

を忍むわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

めんじよ

又、父母の喪に在りながら、兄弟籍を別ち、財を異にしたる有位の官人に對し、附加刑として、その官位を免じ、勳位のものは保留せしこと。これに處せられし者は、一箇年の後、先位に一等を降して敘せらるる定なりき。**めんくわん** (免官) ③「ちよめい」 (除名) ④参照。
めんじよく 面顔 [名] 顔面の色。かほい。
めんじよく 免職 [名] 職を免ぜらるること。現職を解かるること。⑤判事の微罰の一。現任の官を失ひ、恩給を受ける權を失ふもの。
めんす 麵子・麴子 [名] **めん** (麵) ③に同じ。今川大覺無^{めんす}をば、背をすくにして、そつて食ふなり。醒睡笑「折ふし、宿に客あり、麴子を振舞ふにゆきあひ」。
めんす 面す [動] 佐々木^{めんす} 向ふ。むく。對す。「東は、山に面す」不景氣に面す。
めんす 免す [動] 佐々木^{めんす} 免ゆるす。まぬがれしむ。免除す。⑥第三者の面目を立てるために、相手の罪、罪過をゆるし、又はその人の功勞に對して、罪過をゆるす。狂言「岡太夫等」これのお娘子にめんじて、御免なされ。三日月平記「今、信永のむが手討にする奴」なれど、眼前、敵を討取つたる功に免じ、七生^{めんす}までの勤當ぢや」⑦役^{めんす}を解く。官職を退かしむ。
めんせい 免稅 [名] 租稅の納入を免除すること。**めんそ** (免租) 参照。
めんせい 免稅郵便 [名] 郵便物^{めんせい} (無料郵便) の名稱。
めんせい 免稅郵便物 [名] 郵便物^{めんせい} (無料郵便物) の名稱。
めんせい 免稅品 [名] 關稅を免除せられたる輸出入品。
めんせい 免稅點 [名] それ以下は、納稅を免除せらるる最高の金額。
めんせい 面積 [名] ①「數」『英 Area』平面又は曲面の廣さ。(體積に對して)。
めんせい 面責 [名] ①まのあたり責むること。面前にて責め問ふこと。面詰。
めんせい 免責 [名] 責任をゆるすこと。責任を問はぬこと。

めんせき

めんせき 免責時効 [名] ①「法」債權を消滅する消滅時効。
めんせつ 面接 [名] **めんくわん** (面會) に同じ。
めんせつ 面折 [名] ①まのあたり責めくじくこと。面前にて、相手の罪惡を責めくじくこと。
めんぜん 面前 [名] **がんぜん** (顔前) に同じ。面前一糸^{めんぜん}。「句」佛「六根を操りて、雜念を起さしむる最初の一念。根本の無明」(禪宗の語)。
めんせる 綿セル・綿セル [名] ①「經」には紡績綿絲又は瓦斯絲、②には紡績綿絲を原料として、セルジの如くに仕上げたる織物。
めんそ 免租 [名] 地租の納入を免除すること。
めんそ 面痕 [名] 面部に發する痕。
めんそ 免訴 [名] ①「法」刑事裁判に於ける主文の一種。公判に於ては、公訴消滅の場合、即ち公訴時効の完成、確定判決、大裁判の免職、親告罪の告訴棄棄の場合に、判決の主文に於て、又、豫審に於ては、前記の場合の外、被告事件の不成罪、犯罪證據の不充分、公訴不受理の場合に、その終結決定の主文に於て、その被告人に對して、起訴の効力を消滅せしむる決定をなすこと。この決定は、被告人に利益なれば、檢事はこれを有し、又、豫審の場合には、新たな理由生ずれば、再び起訴せらるることとあれど、公判の場合は、再び起訴せらるることなく、免訴の裁判確定したる時は、檢事は、拘留しにる被告人の出監を指揮せざるべからず。
めんそ 面訴 [名] ①まのあたり訴ふこと。面前にて訴ふること。
めんそ ①「植」ははのり (羽葉海苔) を云ふ。『阿波國の方言』。
めんそ 面奏 [名] ①まのあたり奏すること。拜謁して奏上すること。
めんそ 免僧 [名] ①佛「禪寺にて、他に職ありて、坐禪を免ぜらるる僧。免」の僧。
めんそ 免租繼年期 [名] 免

めんた

租年期の經過したる後、なほ繼續して、免租を認可する年期。『同じ』。
めんた (Mentha) [名] ①「醫」めんたおるに。
めんたい 明太魚 [名] ①「動」すけとら (すけとう鰯) に同じ。
めんたい 面対稱 [名] ①「數」へいめんたいしよ (平面對稱) に同じ。
めんたう 馬道 [名] ①「めだう」 (馬道) の音便。榮花「宣耀殿・麗景殿におはしませば、承香殿のめんたうより通り上らせたまふ」②「長き廊下。一説には、廣き板敷なりと。面廊」(註)。「面道」鎌倉年中行事「面道まで待ちて罷出」。
めんたう 面倒 [名] ①「めざほ」 (目遠) の訛。②手數かかること。爲すに煩はしきこと。
めんたう 面倒を見ること。かいほう。五十年忌念、この年までの御面倒、御恩を報ずる事無く。
めんたう 面倒を見る [句] 身のまはりの世話、又は、生活上の保護をす。長町女殿歌「未だ面倒見あふ契約」。
めんたう 面倒臭 [名] ①「形」甚だ面倒なり。非常に煩はし。めんたうくさし。
めんたう 面談 [名] ①まのあたり相談すること。面會して、直接に談話を交ふること。面話。
めんたう 綿段通・綿段通 [名] 紡績綿絲 (綿) を交へて綴りたる段通。鍋島段通赤穂段通などに屬す。
めんたう 綿段通 (英 Menta test) [名] 入學試験・人物採用試験等にて、種種の問を設けて、意識の同時把持力・注意力・記憶力・統合力・推理力・技術力等、精神活動の状態を研査し、その人物の適性を考察すること。
めんち 面打 [名] ①「めんち」 (面打) ②の略。③「めんち」 (面打) を見よ。
めんち 綿胃・綿胃 [名] ①「めんち」 (綿胃) ②の略。③「めんち」 (綿胃) を見よ。
めんち めんち打 [名] ①「めんち」 (めんち) ②の略。③「めんち」 (めんち) を見よ。
めんち 洋食の「一。細かに刻みたる牛肉に、鶏卵

めんち

をかけたもの。
めんち 綿縮・綿縮 [名] 綿絲を材料として綴りたる縮。ちぢみめんち。めんちぢみ。
めんち めんち (英 Mince beef の訛) [名] 洋食の「一。細かに刻みたる牛肉を、馬鈴薯を搗りたる汁にて煮たるもの」。
めんち 洋食の「一。牛肉と馬鈴薯とを搗きあはせて、油にて揚げたるもの」。
めんち 面陳 [名] ①「めんち」 (面陳) に同じ。
めんち 面打 [名] ①「めんち」 (面打) ②に同じ。運色葉集「面打、メンチャウ」。
めんち 面疔 [名] ①「めんち」 (疔) を見よ。
めんち 面長 [名] ①朝鮮總督府の地方長官の「一。面」②に置かれ、府中又は郡守の指揮監督を受けて、その面の地域内の行政事務を補助、遂行するもの。判任待遇とす。
めんち 面張牛皮 [句] ①「めんち」 (面張牛皮) に同じ。榮花「面張牛皮の童にて、心しごとく、聲高にして、親の教訓を聞かず、人の制止事をも用ひず」。
めんち 面中 [名] ①「面」部の中氣の義。②「めんち」 (面中) (顔面神經痛) に同じ。『江戸時代の語』。
めんち 綿蟲・綿蟲 [名] ①「めんち」 (綿蟲) に同じ。「リぞく」こと。
めんち 免黜 [名] ①「めんち」 (免黜) ②の義。免職を免じ、しめられしむること。ゆるして、爲さしめぬこと。除免。③「法」債權者が、債務者に對して、債務を免ずる意思を表示し、これによりて、その債權を消滅する効力を生ずること。
めんち 免除恩給 [名] ①「めんち」 (免除恩給) ②の恩給の「一。下士以下の陸海軍人の、現役十一年以上にして、年限の年齢に達したる場合、又は、年限の年齢に達せざれども、服役満期となりたる場合、又は、傷病、疾病等にて、免官或は現役免除となりたる場合に、その人に、終身給するもの」。
めんち 綿縮・綿縮 [名] ①「めんち」 (綿縮) ②の義。

めん(に生絲)に緯に綿絲を用ひて、普通の縮緬の如くに仕上げたる織物。觀光縮緬。新縮緬。

めん(一) 面桶 [名] 次條の約。常山記「めん」といふ物は、飯を盛る物よ。

めん(一) 面桶 [名] 漢字の宋音。面は面々に配る義。飯を一人前づつ盛り分けて配るに用ひ、後には、乞食の持つ物となりたる曲物也。

めん(一) 免附 [名] 『めん(免)』を見よ。

めん(一) 免附 [名] 徳川時代に、田租の額を、收穫高の幾分幾厘と割りつけし。めん免。りんどうめん。りんどう(一) 厩附取參照。

めん(一) 面體 [名] 『めんさう(面相)』に同じ。『免附取』はてきて興あつた面體の奴(ぢ)ぢやな。『免許狀』の舊稱。

めん(一) 免手形 [名] 『めんきよじやう』に同じ。綿天・綿天(一) 『めんびつろ』と綿天(一)に同じ。

めん(一) 面展 [名] 『めんばい(面拜)』に同じ。下學「面展、メンテン。面拜之義也。めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

めん(一) 免田 [名] 免租の田地。同じ。

に御文を奉りたまひて、面々に御出家あるべし」

めんも 面模(名)めんがた(面形)に同じ。盛衰、先王の舞を舞ふなるには、面模の下にて、鼻を苦むる事にて侍るなり」

めんもく 面目(名)「戦國策の秦國の條に「形容枯槁、面目黎黑」とあり」顔面の様子。かほつき。めんほく(面目)に同じ。曲尺橋谷「御秘藏の鑿切の太刀賜はりしは、武門の譽、身の面目」蘇軾の詩に「不識盧山眞面目、只緣三身在三山、中ことあり」物事の様子。ありさま。状態。「面目、改まる」面目を一新す」

めんもすりん 綿毛斯倫・綿毛斯倫(名)經(綿)に共に綿絲を材料として、モスリンに摸したる織物。新(綿)もす。めんもち 綿緞・綿緞(名)經(綿)に共に綿絲を材料として、緞に摸したる織物。

めんもん 面門(名)「楞嚴經に「從三面門」放三種光」疏に「從口放光也」とあり」くち口」の異稱。めんやう 綿羊・綿羊(名)「動」宋史の層檀國傳に「畜有三綿羊、山羊、牛、羊、家駝、馬、犀象」とあり。らしやめん(羅紗綿)參照」羊の、人家に飼育せらるるもの。むくひつじ。

めんやうまう 綿羊毛・綿羊毛・綿羊毛(名)やうま(羊毛)に同じ。めんゆ 面語(名)まのあたり言ひきかすこと。面前にて説諭すること。

めんゆ 面談(名)その人の前にて、ことさらに媚ひへつらふこと。めんゆふき 綿結城・綿結城(名)ゆふきもめん(結城木綿)に同じ。

めんよ 面譽(名)その人の面前にて、ことさらに譽むること。めんよ 面妖(名)めんよう(面妖)に同じ。諸國はなし「駿河二郎は、めんよな事の夏冬なしに、ふんどし嫌ひ」

めんよう 面容(名)めんさう(面相)に同じ。めんよう 面妖(名)「面妖は假借の字、

殊に、妖の字の假名、正しくはえうなれど、普通、この字を當つてめいようと同じ。藝業毛「お前」この風呂は、どうして這入った。……はて、めんような」

めんよう 面妖(副)「前條の語の轉用」めいようと同じ。藝業毛「めんよう、道中の茶屋では、床の間に、ひからびた花を生けておく」

めんよじのおり 綿吉野織・綿吉野織(名)經(綿)に共に綿絲を材料として、吉野織に摸したる織物。

めんらう 面郎(名)めんだら(馬道)に同じ。曾我「面郎の塵うち拂ひ」諸曲無反「この面郎、かしこの詰」に、追っかけ、追つめ、取らんとすれども」

めんり 綿裏(名)綿のなか。綿裏の針(句)諷刺の語の響。

めんりうきう 綿琉球・綿琉球(名)經には瓦斯絲又は紡績綿絲(綿)に、緯にはシルケットを用ひて、琉球絨に摸したる織物。

めんりんず 綿綸子・綿綸子(名)經緯共に、白色の細き瓦斯絲を材料として、綸子に摸したる織物。

めんるお 麵類・麵類(名)麵の種類の屬する食品。即ち饅頭、素麵、など。

めんわ 面話(名)めんだん(面談)に同じ。めめ(名)こめ(米)に同じ。狂言「比呂士」

めめがきめめ梯(名)「植」やまがき(山梯)に同じ。「紛し」に同じ。

めめぐるじ 目紛し「形」めまぐるじ(目めめぐるじ)目目雜魚(名)目高(か)などの小魚。三代男「この廣い戀の路に、井の内のめめご心」

めめじ 女女し「形」女の如き性質なり。心かよわし。柔弱なり。(雄雄)に對して。源氏「めめしく心弱きとや見ゆらんとおぼすもはづかし」

めめじやこ 目目雜魚(名)前條に同じ。「を」河百道「御神體のわらひ顔、……三日月なりの細眉は、釣針の如くにて、我等が

やうな、人魚のめめじやこ、釣つて、釣つて、釣上げらるる」

めめじやば 女女娑婆(名)「佛」さきほぼつ(ササ菩薩)參照」佛家にて「娑婆」を略して「女女」と書くこと。

めめず 蚯蚓(名)「動」みみず(蚯蚓)の轉訛。淨世昌「辨慶が、三尺餘のめめずの刺」を、頭の頸窩(か)へふんづらぬいたけ」

めめぞうなぎめめぞ鰻(名)「動」鰻の幼魚、即ちしらうをのうばを云ふ。「京都の方言」

めも(英Memo)「名」Memorandumの略。おぼえ帳。備忘錄。「の、薄きもの。」

めもおる 女莫臥爾(名)莫臥爾(女)見の略。會ふこと。「女の手紙に用ふる語」

めもと 目元・目許(名)目のあたり。めつき(目附)に同じ。重井簡「目もとが利發に見えまする」

めもり 目盛(名)尺度(きさ)秤(はかり)の筭計又は基盤などに、區劃の筋を記しつること。又その筋。目を盛ること。目分量にて、器物に盛りつること。

めもりきかい 目盛機械(名)目盛の筋を記しつるに用ふる器械。

めやす 目安(名)文書を記すに、簡條を立てて見やすくすること。又その記し方の文書。めやすがき。一代女よくよくなればこそ、目安書くやうなる様書きでけるはる十三里の處を、無心は申し遣しけるに」

めやすがた 目安方(名)徳川幕府の、民事の訴訟に從事せし諸役人の總稱。めやすがかり。目安掛(名)めやすがた(目安方)に同じ。

めやすがき 目安書(名)めやす(目安)に同じ。諸國現今に命の長く、目安書して、世を渡りけるとなり」

めやすがた 目安方(名)徳川幕府の、民事の訴訟に從事せし諸役人の總稱。めやすがかり。目安掛(名)めやすがた(目安方)に同じ。

めやすがき 目安書(名)めやす(目安)に同じ。諸國現今に命の長く、目安書して、世を渡りけるとなり」

目安を上ぐ(句)訴狀を提出す。民事の訴を起す。「徳川時代の語」關八卦柱「家渡すか、銀立つるか、返事次第に、五日には目安上げる」

目安を附く(名)前條に同じ。五五人「人の分散にあへるも可笑しかりしに、今身の上に目安附けられ」

めやす 目安(名)めやすし(目安し)の語幹。目安きこと。源氏「いよう住み馴れたまひたれば、目安のわざやと見奉るものから」

めやすうらがき 目安裏書(名)徳川時代に、目安の裏面に、評定所に出頭すべき期日等必要の項目を記して、被告に送りしこと。送りし日より、七日間の内に

めやすうらがき 目安裏書(名)徳川時代に、目安の裏面に、評定所に出頭すべき期日等必要の項目を記して、被告に送りしこと。送りし日より、七日間の内に

めやすうらがき 目安裏書(名)徳川時代に、目安の裏面に、評定所に出頭すべき期日等必要の項目を記して、被告に送りしこと。送りし日より、七日間の内に

めやすうらがき 目安裏書(名)徳川時代に、目安の裏面に、評定所に出頭すべき期日等必要の項目を記して、被告に送りしこと。送りし日より、七日間の内に

めやすうらがき 目安裏書(名)徳川時代に、目安の裏面に、評定所に出頭すべき期日等必要の項目を記して、被告に送りしこと。送りし日より、七日間の内に

めやすうらがき 目安裏書(名)徳川時代に、目安の裏面に、評定所に出頭すべき期日等必要の項目を記して、被告に送りしこと。送りし日より、七日間の内に

めやすうらがき 目安裏書(名)徳川時代に、目安の裏面に、評定所に出頭すべき期日等必要の項目を記して、被告に送りしこと。送りし日より、七日間の内に

めやすうらがき 目安裏書(名)徳川時代に、目安の裏面に、評定所に出頭すべき期日等必要の項目を記して、被告に送りしこと。送りし日より、七日間の内に

めやすうらがき 目安裏書(名)徳川時代に、目安の裏面に、評定所に出頭すべき期日等必要の項目を記して、被告に送りしこと。送りし日より、七日間の内に

めやすうらがき 目安裏書(名)徳川時代に、目安の裏面に、評定所に出頭すべき期日等必要の項目を記して、被告に送りしこと。送りし日より、七日間の内に

めやすうらがき 目安裏書(名)徳川時代に、目安の裏面に、評定所に出頭すべき期日等必要の項目を記して、被告に送りしこと。送りし日より、七日間の内に

あやむく

めやすじやう 目安狀〔名〕目安の青
狀。大落物監憚一虎口之説狀、捧目安狀こ
めやすはこ 目安箱〔名〕めやす(目安)
のを見よ 庶民をして、直訴狀を投入せ
しむるために、評定所の門前に出しおけ
し箱 徳川時代には享保六年閏七月、初
めて設け、毎月二月十一日二十一日の
三日間、晝九つ時までは、評定所の門前
に出しおき、投入の訴狀は、將軍、親しこ
れを聞き、所定の條件に適合せるものは、受
理したり。はつこ箱訴(参照。甲陽軍鑑)御
陣留守には、御藏の前衆目安を受取り、目
安箱に入れおく

めやすよみ 目安讀「名」徳川時代に、評
定所にて、目安^二を讀み上げしこと。評
定所儒者、これに當れり。
めやすこ 女奴「名」^二めのこやつこ^一(女子
又「名」)

奴に同じ。〔古語〕（新加）「マツ」
女を罵りていふ語。〔古語〕 萬葉こり塗
れる塔にな寄りそ用くまの糞鰯はめるい
たき女奴」

めやなき 芽柳〔名〕芽の萌え出でたる柳。 皇寛 芽柳の奥たのもしき若葉かな

る汁の、目の縁に凝り固まりて脂の如くなるもの。めあか。めくそ。

目脂 鼻垢(アカ)を笑ふ【句】「目糞
鼻糞をを笑ふ」に同じ。〔諺語〕

め「やま」女山【名】或山を人に擬して
女性と見なしていふ語。(男山に對して)

「三山(三山)の争」参照。
め・やみ 目病・眼病【名】目を病むこと、

又目を病める人 眼病(やまひ)
病の地藏

目病の一週(びし)は七十日【俗】
の一週は五十日」に同じ。【諺語】

め、み、な、ん、な 眼病女 [名] 眼病に罹つてゐる女。

眼病女に風引男【句】との二病は、
氣に見ゆる者なりとて、並べていふ。

めゆひ

めゆひ 目結〔名〕は動物の目の如き形なるよりいふ。の如き形を幾つも散し、又は縦横に並べて、染めたる模様。布帛を、所所さまみ上げて、絲にて結ひたる上、染汁に浸し、後、絲を解けば、結ひたりし部分だけ、白きままに残る故、この模様を生ず。くくりぞめ。しぼりぞめ。しぼり。かのこしぼり。かのこ。めりぞくり。めぞめ。平寧年のよはひ二十ばかりなる女房の、……、目ゆひの帷子(かき)に、染附(ぞめ)のゆまきして」會勢十郎密に、所所の一。の如き形を描けるもの。その数によりて、(一)目結三、(二)目結四、(三)目結五

ツ目結六(ツ)目結九(ヨ)目結十二目
結十六目結、又略しては、一目(ツビ)
三目(ム)四目(ヨツ)五目(ヲツ)六目(ムツ)
九目

(三)十二目十六目などいひ、又三盛
目(リツモ)などいふもあり、又、その配列の
様によりて、平(ヒラ)目結角(ヒサ)目結繫(フナ)
目詰寄懸(ヨセ)目詰などの種類あり。最も

目糸(メイト)は、目糸(メイト)の種類。普通なるは四目結にて、平四目・角四目・繫四目などの種類あり。め。俗曲(京鹿子)「これは京鹿子(ギョウコ)色もよや、目結手際もよ

や、著よや」 「出したる草。
めゆひーがは 目結草【名】目結□を染め
めよう【名】めんよう（面妖）に同じ。 柳樹

「めような晩禿^(カム)」やつべし耳に口」
めら目ら〔名〕『らは接尾語』め(目)〔目〕
に同じ。〔古語〕 萬葉「わが目はますみに同じ。」

の鏡」
めら 布良〔名〕〔地〕安房國安房郡富崎村
の大字。房總半島の西南端に位し、漁業

めらば

ひたるもの。(雄蜂^{おとすち}に對して)
め^らは 女童^{にようぢ}〔名〕めのわらは(女童)の略。
め^らら 字音。字義。この隣のめらは〕
めらんこりい(英 *Me-lancholy*) 〔名〕氣の
ふさぐこと。陰氣。憂鬱。
めらんこりや 憂鬱症(英 *Me-antholia*)
〔名〕いづい^{いづい}や(憂鬱症)に同じ。
めらめら 〔貌〕脆く燃ゆるさま。竹煎^{たけせん}め
らめらと燒けにしかば、
め^ら減^へ 〔名〕めるること、又めりたる部
分。 〔横笛尺八等を吹くに、領を常の
位置より引き込めて、軽く吹きて、沈みた
る音を發すること。〕かりに對して)

めり【罵詈】【名】『漢字の吳音』ばり(罵詈)
に同じ。太平記「罵詈(バ・誹謗)」
めり【助動】その様に見ゆる意。『古語』
「罵詈(バ・誹謗)」

並べて見ればをぐさ勝ちめり」大鑊さて、閣下はいかにといふれば、世繼がい

めりいーごおらうんど (英 Merry-go-round) 【名】心棒を軸として廻轉する圓盤の周圍に、木馬又は馬車・自動車などに模

したる物、數基を取り附け、小兒等、その木馬などに乗れば、圓盤は廻轉して、實物に乗りて走るが如き感じを興ふる遊戲、

又その器械
めりかり 滅甲【名】音の浮沈抑揚。
めりき (蘭Milkの訛)【名】みるくに同じ。

めりけん 米利堅 (英 American) 【名】 【地】
めりけん (亞米利加) 同。 甲陽軍鑑「おしかかり強く、めり口早く」

めりけりん」と米利堅粉〔名〕亞米利加合衆國より輸入する小麥粉。精製したる饅頭粉。主として、麵包の製造に用ふ。

めりけん

めりけんまつ 米利堅松〔名〕 亞米利加
産の松の材木。米松(マツ)。
めりこむ 滅込む〔動四他〕 自然にめいり
て、又は、壓さむて、深くもぐる。續藤栗毛
「ついぞ、駕籠をかついだ事はねえが、…
…肩がめり込むやうだ」
めりの(西Merino)〔名〕〔動〕羊の一品種。
毛絲の採取を目的として飼育するもの。
もと西班牙より諸國に傳布せるもの。
て、飼育の方法、飼育地の氣候、地味等に
よいて、幾多の種類を生じたり。この羊
の毛は、濠洲のボタニ(Bounty)灣より英
國に出荷せしより、ボタニ毛絲の名あり。

めりんす参照。
めりんすは、減張（名）弛（た）むことと、張ること。劇場にての、俳優の意氣

張りをはめる」参照。
 延と龍峯の象受との關係、あるに強る
めりんす (西 Merinos) 【名】『メリノの毛
 毛斯倫』にて織るに由りてハム『毛斯倫』

めりんすーいうぜん　メリンス友禪〔名〕
もすりんいうぜん(毛斯純友禪)に同じ。

めりーめり【貌】みりみに同じ。狂言盗人連歌「まづ縄を切りほどいた。さらば、垣を破らう。めり、めり、めり。さても、夥し

う鳴つた事かな」
めりやす 莫大小・目利安・女利安（西 *Maria* 葡 *Marias*）【名】『原語は靴下（ソックス）の

義』毛絲又は綃絲(コ)を材料とし、經(チク)又は緯(コ)の一方のみにて、これに次次に、罽(カ)を作り、隣の絲の罽と絡みあはせ、富貴(フキ)、土長(ツナガ)、又は筒形に編み

